

独立行政法人文化財研究所に係る業務実績に関する評価（平成13年度）

◎ 全体評価

評 価 項 目		評 価 の 結 果
事業活動		全体として、独立行政法人化以前と比較しても事業が意欲的に展開されており、初年度としては順調・適切に行われていると評価できる。ただ従来の事業を護るだけでなく、独立行政法人化の趣旨を生かした独自の新しい事業展開が期待される。
	1 文化財に関する調査・研究	全体としては高度の調査・研究が適切に展開されており、基礎研究を踏まえた上での先端技術の導入開発もなされ成果をあげている。またこの面での国際交流にも大きな成果をあげており、計画は順調に進んでいるものと判断される。
	2 調査・研究に基づく資料の作成・公表	調査・研究に基づく資料の作成・公表が順調に進捗しており、それらの成果は研究会や学会ならびに刊行物として公表されている。なお、発掘調査の報告書の刊行にはある程度の時間が必要であるが、その短縮のためにさらなる努力を期待する。また、研究の成果が広く多くの機関、研究者に供給されることが必要であろう。
	3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供	計画に基づき適切に行われていると認められ、公開されているデータに加え、将来公開される見通しのデータなど、長年の伝統に基づいた整理の上にデジタル化が進められている。情報提供については今後より広く実施し、多くの人が使えるようになることもっと素晴らしいであろう。
	4 文化財に関する研修等	従来通り精力的に国内外を含めて研修がなされており成果があがっているが、できるだけ多くの人が研修を受けられるよう今後とも努力が必要であろう。保存科学については、当研究所が長年蓄積し、かつ現在あげつつある成果の受け手にあたる文化財センターや博物館側に専門官が少なく、より大きい基盤作りを考えると、我が国全体の在り方をどうすべきかが課題と思われる。
	5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言	文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言が適切に行われている。大極殿の復原を含む平城宮の整備事業については、文化庁とともに、さらに国民の理解を得、期待を高めるための努力が求められよう。研究の成果が広く多くの機関、研究者に供給されることが望まれている。
業務運営		全体として、独立行政法人化の趣旨にしたがい、業務の効率的運営に努力し、十分な成果を上げていると評価できる。
	1 理事長の主導性	両研究所の統合と独立行政法人化という設置形態の大きな転換にもかかわらず、業務の効率的運営に大きな成果をあげていることから、その指導性は評価される。国際協力・国際共同研究の一本化、東京・奈良での役員会の実施、事務の合理化などは、成果が表れた結果と思われる。ただ、リーダーとして新しい発想が必要である。今後、発想を転換して、両研究所が統合・法人化されたメリットをさらに活かし、両者のより一層緊密な関係をもとに新しい研究機関へと脱皮されることを期待したい。
	2 効率性	多くの部門で、業務の効率性を高める努力がなされているが、今後とも職員の意識に浸透することが重要である。従来の業務以上に独立行政法人化に伴う諸手続、評価のための資料作成、業務改革など、相当の業務が必要になったと思われるが、それらについてもより一層の効率化を進められたい。なお、東西の地域的隔たりによるロスを解消する手段として、通信手段を使った会議などの活用によって、一層の効率化を図ることが可能ではないだろうか。
	3 財務	初年度2.92%の経費の節減など、財務の運営に努力のあとが認められる。さらに大型科学研究費の獲得など外部資金の確保の努力が求められよう。ただし、次年度以降も過度な効率化を求めることで、研究・調査事業の伸展を後退させるのこのたないよう注意が必要と考える。
	4 人事	人事運営は適切に行われていると判断される。独立行政法人化の趣旨からも、国の機関や独立行政法人以外も含め、博物館、美術館、大学等との間で多様な人事交流などが望まれる。スタッフ増が望めない現状では、より一層の効率化・機能性の追求が次に要求されなければならないであろう。従来の基盤があつての成果と思われるが、協力調整官、国際情報室、文化財情報課、文化財情報発信専門官などを強化・配置することにより情報発信に関わる分野を充実できたものとして評価される。
	5 その他	特になし
そ の 他		独立行政法人に求められている業務の効率化の推進と、独立の研究機関としての自由な発想に基づく研究の進展を如何に調和させるかが今後の運営に求められよう。また、いずれ博物館、美術館、文化庁の各部門あるいは他の機関と研究、調査、情報提供など業務内容の分担について再検討が必要と思われる。また、研究・調査・資料作成・公表・保存処理・修復・整備とこれらについての研修の実施・援助・助言という多岐に亘る活動を行っているが、これらの幾分かでも民間を含め外部を活用することによって、よりゆとりある、充実した運営がなされないものかと思われる。
総 評		独立行政法人化の趣旨にしたがって業務の効率的運営に努力し、文化財に関する国家的研究機関として、中期計画の初年度が計画通り達成されているものと高く評価できる。独立行政法人化以前の事業を護るだけでなく、独立行政法人化の趣旨を活かした独自の新しい事業展開が期待される。業務運営の効率化や独立行政法人としての評価が、自己規制になるのではなく、さらなる発展につながることも期待したい。また、文化財研究所の業務活動の結果である多くの研究成果を、広く知らせる努力も重要であろう。

◎ 項目別評価

〔段階的評価の区分の考え方〕
A：中期計画を十分に履行し、中期目標に向かって着実に成果を上げている（基準値に対して100%以上の実績を上げている場合）
B：中期計画をほぼ履行し、中期目標に向かって概ね成果を上げている（基準値に対して100%未満80%以上の実績を上げている場合）
C：中期計画を十分には履行しておらず、中期目標達成のためには業務の改善が必要（基準値に対して80%未満の実績しか上げていない場合）
なお、特に優れた実績を上げた場合は、A+の評価を行うことができるものとする。

○ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画の各項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、運営費交付金を充当して行う業務については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。 具体的には、下記の措置を講ずる。	・業務の効率化状況				全般的に経費の節約を図るなどの努力をし、平成13年度予算に対し2.92%の効率化を達成した。	A	標準的な業務の効率化の目標が1%削減であるところ、初年度において2.92%の効率化は、大幅な削減を達成したとして十分に評価できる。業務の効率化のため具体的に年度計画に掲げた項目をいずれも着実に実施しており、またその成果を上げており、その努力も十分に認められる。
	・経費の削減率	1.5%以上	1.5%未満 1.0%以上	1.0%未満	2.92%	A	
1 国際協力、国際共同研究について「国際文化財保存修復協力センター」への一元化による業務の効率化	・組織の一元化の状況 ・業務の効率化状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターと奈良文化財研究所埋蔵文化財センター国際遺跡研究室の業務について連絡調整を行い、国際協力事業等を効率的に実施する体制の構築を図った。	A	国際協力、国際共同研究は、両研究所が共に目指さなければならぬ重要な課題である。その試みとして、奈良・東京共通の交流相手方と、理事長名義で基本的覚書を取り交わすなど、事務の一元化を着実に進行させている点は、効率的であり十分に評価できる。
2 両文化財研究所の共通的业务の効率化	・共通的业务の効率化状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			予算決算に係る総括事務を総務課予算・決算係で、共済組合の総括事務を奈良文化財研究所管理課会計係で行うこととした。	A	東西に分かれている両研究所の共通的业务の効率化のため、予算決算に係る総括事務と共済組合に係る総括事務を一元化した努力は十分に評価できる。
3 両文化財研究所の組織の見直しによる経費の削減	・組織の見直し状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・本部機能として総務部を新設 ・東京文化財研究所:研究部門においては協力調整官の新設。事務部門においては、部制化し1部1課とした。 ・奈良文化財研究所:研究部門に文化遺産研究部を新設。事務部門においては、部制を2課体制から3課体制に改組した。	A	組織の見直しについて努力している点は評価できる。ただそのメリットやデメリットについては、今少し時間をかけて点検・評価する必要がある。
4 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進	・省エネルギー推進状況 ・廃棄物減量化推進状況 ・リサイクル推進状況 ・ペーパーレス化推進状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			日頃から節電節水等の周知徹底、夏季におけるノーネクタイ等軽装の励行、冷暖房の省エネ運転の実施、コピー機の利用に際しては、カウンターカードを使用し予算差し引きを行うとともに再生紙の利用、古紙の回収、所内LANの活用によりペーパーレス化を図った。	A	コピー機の部局別カウンターカードの利用やLANの利用によるペーパーレス化の推進など、効率的であり、積極的な努力は十分に評価できる。順調に成果を上げているようであるが、まだ改善の余地はあると思われるので、より一層の努力を期待したい。
5 セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進	・施設の有効利用の推進状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			施設の利用状況、貸付状況 東京文化財研究所セミナー室 3件 奈良文化財研究所平城宮跡資料館小講堂 5件	A	施設の有効利用のため、施設使用貸付規程を制定し外部への有料貸付を開始したことは、有用的であり十分に評価できる。
6 連絡システムの構築等による事務の効率化	・連絡システムの構築状況 ・事務の効率化状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			各研究所間の事務連絡をメールにより行うとともに、会計システムネットワークを構築し、会計事務の一元的管理、効率化を図った。	A	会計事務ネットワークの構築やEメールによる事務連絡等、効率化のための努力は十分に評価できる。
7 業務の外部委託、事務のOA化の推進等による効率的な事務の執行	・業務の外部委託推進状況 ・事務のOA化推進状況 ・事務の効率化推進状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			奈良文化財研究所における受付業務及び各部局間の連絡便の外部委託を行った。	A	奈良文化財研究所における受付業務、文書連絡便の外部委託等による事務の効率化は十分に評価できる。
8 法人の自己点検評価のあり方について検討し、適切な自己点検評価を実施するとともに、今後の法人運営の改善に反映させる。	・自己点検・評価の実施状況 ・法人運営の改善状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			自己点検評価実施規程を制定し、評価委員会を置き、外部評価委員の委嘱を行った。評価委員は自己点検評価実施要領を策定し、これにより自己点検評価を行った。	A	それぞれの分野の専門家を集めて実施した外部評価を含む自己点検評価の実施には多大な労力が必要であったと思われ、その努力と有用性は十分に評価できる。自己点検評価システム自体のさらなる合理化、簡略化により、自己点検評価が法人運営において過大な負担とならぬよう注意が必要と思われる。

○ 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画の項目	指標又は評価項目	評価基準			指標又は評価項目に係る実績	評 定	定性的評価及び留意事項等
		A	B	C			
1 文化財に関する調査・研究 1－（1）－① ア 東アジア地域における美術交流の歴史や日本美術に及ぼした影響について解明するため、美術に関する資料を収集し、分析、研究を行い、得られた成果を報告書として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・黒田作品の光学調査の成果をまとめ「黒田清輝（智・感・情）」美術研究作品資料第1冊を刊行した。 ・「異文化受容と美術」のテーマのもとに連続ミニシンポジウムを行った。 ・日本・東洋美術研究文献の活用に関する研究のため、編集上の問題点の検出及び書誌データの全体量の把握作業を行った。 ・オランダライデン大学のシンシア・フィアレ氏を招へいし、沖縄県立博物館等において、琉球と日本の漆器の比較研究を行った。 ・中国南京地区の棲霞山石窟湯山石窟において、調査を行い、これに関する調査・研究の成果を公表するとともに、今後検討すべき問題の共有化を目指し、中国壁画研究協議会を開催した。 (参考指標) ・収集資料数 31,576 件 ・調査・研究報告書等刊行数 2 件	A	東京文化財研究所が数年前から取り組んでいる重要なテーマであり、中期計画に基づき着実に進行しているものとして十分に評価できる。アジアにおける文化財研究の拠点として、さらなる研究の深化を期待するとともに、研究結果の社会的貢献、積極的な情報提供について検討が必要と思われる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2 件以上	1 件	0 件	掲載論文数 7 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	10 件以上	10 件未満 8 件以上	8 件未満	発表件数 17 件	A	
イ 我が国の近代美術の発達に関して、時代ごとに調査・研究を進めるとともに黒田清輝に関する研究を進める。資料収集、分析、研究を通じて得られた成果を「大正期美術展覧会出品目録」、「昭和前期美術資料集成」（仮称）、「黒田清輝油彩画総目録」等の目録として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・明治期博覧会の研究の中で、今年度は先年度に入力した府県博覧会出品目録12点の目録について校正作業を行った。 ・大正期美術展覧会出品目録のデータ集成と研究協議会の開催、戦前期の展覧会目録等400点をデータ化し、整理し資料の補完を図った。 ・黒田清輝通り命名にともなう現地調査、「パンテオン会」研究協議会の開催及び白馬会展出品目録の調査を行った。 ・笹木繁男氏主宰「現代美術資料センター」所蔵資料の寄贈を受け、その資料の整理作業と並行して「寄贈目録」を刊行した。 (参考指標) ・収集資料数 9,910 件 ・調査・研究報告書等刊行数 1 件	A	いずれの資料も利用価値の高い優れたものであり、これら目録の刊行は、有用的で高く評価されるべきものである。各時代とも着実に資料の収集、データの整理、関連の研究がなされており、中期目標に向けて順調に進行しているものとして十分に評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	掲載論文数 3 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	2 件以上	1 件	0 件	発表件数 2 件	A	
ウ 伝統芸能に関する調査及び外国との比較研究のため、現地調査及び記録作成、分析を行い、得られた成果を報告書として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・近代期の歌舞伎台帳の所蔵調査の中で、本年度は松竹大谷図書館と早稲田大学演劇博物館の収蔵調査をすすめた。 ・上演実態をめぐる資料の調査として、竹本床本、近世期の衣裳附・化粧附などの所蔵調査を行った。 ・歌舞伎・文楽において、上演が稀少な演目の上演実態の調査を行うとともに、歌舞伎・文楽の現状や無形遺産保護の国際的環境に関する論考を発表した。 ・過去5年間の特別研究の成果の一部を、報告書として刊行した。 ・能楽の技法記録として、金春流桜間派の謡を記録した。 (参考指標) ・収集資料数 479 件 ・記録作成数 1 件	A	伝統芸能に関する調査として設定している歌舞伎台帳の収蔵調査、文楽の裏方資料調査、能楽の技法記録それぞれについて、5年計画の1年目として順調に進行しているものと思われ、独創的であり十分に評価できる。なお、次期計画には、もう少し伝統芸能の保存に直接役立つ調査設定の検討を期待したい。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	掲載論文数 3 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	2 件以上	1 件	0 件	発表件数 3 件	A	
エ 伝統楽器の変遷に関する資料収集・調査・研究を行い、得られた成果を所蔵目録及び報告書として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・関東・関西・九州・四国の博物館へアンケートを送付し、楽器の所蔵状況を調査した。そのうち佐賀県鍋島報効会徴古館所蔵の楽器について実地調査を行った。 ・徳川美術館蔵の琉球楽器、東京芸術大学資料館蔵明楽器の調査を行い、資料を収集した。 ・鼓胴の変遷研究の一環として個人蔵の鼓胴を調査し、その結果を第25回国際研究集会、第6回世阿弥忌研究セミナー等で発	A	伝統楽器の所蔵状況調査並びに実地調査が、計画にしたがい順調に進んでいるものとして、また独創的なものとして十分に評価できる。最終的には研究所全体としての考察を経た、幅広い研究成果としての報告書の刊行を期待したい。

			(参考指標) ・収集資料数 517 件				
	・学術雑誌等への掲載論文等数	1 件以上	——	0 件	掲載論文数 1 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	4 件以上	4 件未満 3 件以上	3 件未満	発表件数 4 件	A	
オ 民俗芸能の上演目的や上演場所の歴史的変遷に関する調査研究を行い、民俗芸能の本来の意義を明らかにし、報告書として刊行する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・変容や消滅の危機に直面している民俗芸能の「床板上で踊られる盆踊」（調査対象地 徳島県）他 1 件について、現地調査と資料収集を実施し論考を公表した。 ・「第40回北上みちのく芸能まつり」（岩手県北上市）他 3 件の現地調査を行い必要資料を収集した。また、イベントに出演する芸能の現地公開状況を確認するため、「広瀬のかんこ踊り」（三重県鈴鹿市）の現地調査を実施し、それらの成果を総合研究会で発表した。 (参考指標) ・収集資料数 117 件 ・調査・研究報告書等刊行数（民俗芸能協議会報告書） 1 件	B	計画 1 年目ということで、調査・資料収集が主活動となったようであるが、最終的には研究所全体としての考察を経た、幅広い研究成果としての報告書の刊行を期待したい。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2 件以上	1 件	0 件	掲載論文数 2 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	2 件以上	1 件	0 件	発表件数 2 件	A	
1－（１）－② ア 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡について、以下の発掘調査を実施し、古代都城の実態解明のための調査・研究を行い、得られた成果を報告書として刊行する。 (平城宮跡) 第一次大極殿地区、第二次朝堂院地区、東院地区 (藤原宮跡) 宮朝堂院跡、京内条坊街区	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・平城宮跡第一次大極殿地区の西楼の存在有無の確認を主目的とし、その西半部の遺構検出を実施した。 ・平城宮跡第二次朝堂院の朝集殿院南門の全体構造と、関連諸施設を明らかにするため、今年度は南門とそれに接する東西築地、南門北の庭の一部を発掘した。 ・これまで藤原宮大極殿院東側の内裏地区から朝堂院東第一堂にかけて調査してきたが、今年度は大極殿院東回廊・東殿を対象とし発掘調査を行い、調査結果については、紀要・報道発表・現地説明会で公表した。 ・藤原京条坊街区解明にとって重要な、藤原京左京七条一坊西南坪の発掘調査を行い、出土遺物で数千点におよぶ木簡が出土した。大宝律令施行直後の実際の行政を知る大きな手がかりとなると考えられる。 ・橿原市高殿町の高所寺池の北半部の発掘調査を行い 5 世紀から 7 世紀に至る遺構・遺物を検出し大きな学術的成果をあげた。 (参考指標) ・出土品調査件数 27,941 件 ・記録作成数 2,716 件	A	平城宮、藤原宮の継続調査が着実に進められ、様々な研究への発展性があり、十分に評価できる。ただ藤原京については、調査・研究の進展の結果、その規模が従来の想定より大幅に大きいことが判明したが、京域それ自体や条坊の計画・施工時期などについて諸説が一致していない。これは藤原京の今後の保存や調査計画の策定上からも大きな問題であり、藤原京の範囲を確定するための計画的な調査を早急に実施すべきであろう。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	掲載論文数 5 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	1 件以上	——	0 件	発表件数 1 件	A	
イ 平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡以外の遺跡で上記アと密接な関係を有する以下の遺跡の発掘調査を実施し、比較研究を行う。 (平城宮跡地区) 興福寺中心伽藍、興福寺大乘院、興福寺一乗院、東大寺中心伽藍、法華寺阿弥陀浄土院、平城宮東院南方遺跡 (飛鳥・藤原宮跡地区) 石神・水落遺跡、飛鳥寺跡	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・興福寺中金堂とそれに接する東西回廊の一部の発掘を実施し、回廊は単廊を複廊に立て替えたことが判明し、南都諸大寺は複廊形式とする従来の学説を修正する発見として新たな展開が期待できるものであった。 ・大乘院庭園大池西北隅を発掘調査した。これは江戸期には存在した西小池の存在や構造などの確認を目的とするものであり調査の結果東南部の一部を除いてほぼ全容を明らかにすることが出来た。 ・興福寺子院の一乗院庭園北西の一郭を発掘調査し寝殿の一部と上下二面の園池遺構を確認した。 ・平城宮に近接した東院南方遺跡のうち長屋王邸の一郭を発掘調査し、掘立建物1棟と塀2条などを検出した。 ・西ノ京の薬師寺の現伽藍の北を限る北門を設置するにあたっての事前調査を行い、近世の土塀および上水道の遺構を検出した。 ・石神遺跡の北側の発掘調査を行い、検出した主な遺構は7世紀の各時期にわたり、継続的かつ計画的な造営の状況が確認できた。 (参考指標) ・出土品調査件数 149,773 件 ・記録作成数 856 件 ・調査・研究報告書等刊行数 1 件	A	平城京内の興福寺中金堂、大乘院庭園や飛鳥の石神遺跡などの調査は、奈良文化財研究所創設以来の永続的研究テーマに基づくもので、有用性、発展性ともに、その着実な成果は高く評価できる。また、年報その他によるその成果の迅速な公表のための努力も十分に評価できるが、今後は、学会等での発表にも意を用いられることを期待したい。

	・学術雑誌等への掲載論文等数	5件以上	5件未満 4件以上	4件未満	掲載論文数 9件	A		
	・学会、研究会等での発表件数	1件以上	——	0件	発表件数 1件	A		
ウ	上記発掘調査による出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、得られた成果を報告書として刊行する。また、古代飛鳥のイメージ再現研究として、模型、コンピュータグラフィック、出土品のレプリカを作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・模型等作成状況 ・コンピュータグラフィック作成状況 ・出土品レプリカ作成状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・平城宮・平城京出土の木製品等の整理、分析研究、保存処理および出土遺構の図面、写真の作成を行い、分析研究にあっては年間を通じて発掘調査と併行して遅滞なく実施した。 また、平成13年度以前の出土品についても、コンピュータ処理によるデータ化を目指しての再整理を実施した。 ・飛鳥池遺跡の莫大な量の出土遺物の分類整理事業を中心とし、今年度調査の出土品および遺構実測図については紀要での公表のための整理を実施し、公表した。報告書関係では、これまで進めてきた山田寺発掘調査報告書を刊行した。 (参考指標) ・学術雑誌等への掲載論文等数（再掲） 1件 ・学会、研究会等での発表件数（再掲） 5件 ・調査・研究報告書等刊行数（再掲） 4件	A	出土遺物の保存処理や調査記録の整理・分析が適切に行われていることは高く評価できる。なお、論文等だけでなく、広く一般社会へ情報発信することが望ましい。
エ	文化財建造物の保存及び修復に必要な基礎データを蓄積し、分析・研究を行う。得られた成果により全国各地で行われている文化財建造物の保存のための指標となる研究報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・今年度は「元興寺・保存古材」と「出雲大社・社殿」について調査研究を行い、特に国宝「元興寺禅室」の小屋裏に保管されていた保存古材を調査した結果、元興寺の前身である飛鳥寺創建時の年代が検出された。(年輪年代測定による) ・岐阜県高山市下町区域を対象として、伝統的建造物群の文化財的価値を計るための調査を行い(一次・二次)、その結果を踏まえ住民により組織された各町並み保存会への報告を行い高山市教育委員会と協議を重ね、保存計画策定に向けて援助・助言を行った。 ・文化財建造物における今後の保存修復のあり方と取り組み方の具体的な方向性を、4部会構成で調査研究し、その成果をもって文化財保護行政、保存修理事業、学術研究などへの提言を目指すものであり、今年度は現地調査・資料収集等を行うとともに各スタッフにおいて執筆作業を進めるなどしている。 (参考指標) ・基礎データ収録数 3件 ・記録作成数 650件	A	年輪年代学の推進により、元興寺の古材から飛鳥時代の創建当時の年代が検出されたことは、建築史や古代史にとっての大きな成果だけでなく、文化財として保存することの大切さを示す格好な研究として、また研究の発展性が期待できるものとして十分に評価できる。また、高山での伝統的建造物群の保存のための調査なども高く評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	6件以上	6件未満 4件以上	4件未満	掲載論文数 6件	A		
	・学会、研究会等での発表件数	5件以上	5件未満 4件以上	4件未満	発表件数 5件	A		
オ	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿復原に関して、専門的・技術的な援助・助言を行うため、設計及び施工に関する実践的な研究を実施する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			大極殿正殿の施工着手にあたり、各関係機関の役割分担の整理、施工及び管理内容の検討の参考として、これまでの復原事業における資料を整理して提供した。同時に、実施すべき調査研究について計画案を提示した。	A	平城宮大極殿復原に備えての調査研究についての計画案の作成などが着実に進められていることは十分に評価できる。文化庁とも協議し、大極殿復原の意義や活用計画についても、今後の課題として研究することが必要と考える。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	1件以上	——	0件	掲載論文数 1件	A		
	・学会、研究会等での発表件数	1件以上	——	0件	発表件数 1件	A		
カ	古代庭園に関する資料収集を行い、分析・検討の結果、報告書を作成する。また、これまでに蓄積してきた発掘庭園に関するデータベースを質、量の両面から充実させ、逐次公開する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・データベース内容充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			今年度は、飛鳥時代以降の庭園に影響を与えた可能性がある古墳時代以前の湧水と流れからなる矢瀬遺跡・城之越遺跡・大柳生宮ノ前遺跡他4遺跡について、資料収集、現地調査を行うとともに、各遺跡の発掘調査担当者、関係研究者を集めて研究会を開催した。 (参考指標) ・収集資料数 7件 ・収集写真・図面・関連資料 200件 ・データ収録数 287件 ・データベース利用件数 平成14年度公開予定のため平成13年度は実績なし	A	飛鳥時代以降の庭園に影響を与えたと思われる古墳～飛鳥時代の流水遺構などの調査・研究活動は、発展性あるものとして十分に評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	6件以上	6件未満 4件以上	4件未満	掲載論文数 6件	A		
	・学会、研究会等での発表件数	1件以上	——	0件	発表件数 1件	A		
キ	飛鳥地域の歴史に関する調査・研究を実施し、飛鳥地域の歴	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			春期特別展では「遺跡を探る」と題し、遺跡探査の歴史と現状を展示し、秋期特別展では「飛鳥のイメージ」と題しこれまでの模型	A	飛鳥地域の歴史に関する調査研究に大きな成果が上げられていることは、有用的であり十分に評価できる。なお、飛鳥の諸遺跡

	史を解明するとともに飛鳥資料館の展示を通して有効に活用する方法を検討する。	・展示方法等の検討状況				や復元ジオラマを写真で展示した。また、市民参加の活動として、土器製作教室等を開催し一般の興味を高めることが出来た。 (参考指標) ・収集資料数 750 件 ・調査・研究報告書等刊行数 1 件		の調査の進展により一般の関心が高まっているなかで、飛鳥資料館ならではの、更なる意欲的な企画の特別展示を期待する。
		・学術雑誌等への掲載論文等数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	掲載論文数 4 件	A	
		・学会、研究会等での発表件数	4 件以上	4 件未満 3 件以上	3 件未満	発表件数 4 件	A	
1－（１）－③ 下記の古社寺所蔵の歴史資料・書跡資料等に関する原本調査及び記録作成等を行い、文献の面から日本の歴史、文化の源流等の実態を探る。得られた成果により、報告書及びデータベースを作成する。 （調査対象）興福寺、東大寺、薬師寺、法隆寺、西大寺	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・データベース内容充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・本年度は、興福寺・薬師寺・東大寺・法隆寺の調査を行った。このうち、興福寺においては、「興福寺典籍文書目録第三巻」に目録を収録する予定の第61函～第80函分について、第79函分までマイクロフィルムによる写真撮影を終えた。その他の古社寺においても資料整理、写真撮影、調書作成などを行った。 ・国宝唐招提寺千手観音立像(金堂安置)の宮殿型持物のレーザースキャナ測量を行い、国宝重要文化財建造物等の修理工事を行う際に作成する建築軒廻り規矩図とほぼ同様の図面を作成した。 ・唐招提寺境内の景観変遷資料として明治・大正年間撮影の写真資料を収集した。 (参考指標) ・原本調査数 190 件 ・記録作成数 1,381 件 ・データ収録数 700 件 ・データベース利用件数 平成14年度公開予定のため平成13年度は実績なし		A	南都諸寺所蔵資料についての息の長い調査研究が続けられていることは十分に評価できる。特に仏像彫刻の持物についてのレーザースキャナ測量など新しい技術による調査の実施は、発展性があり高く評価できる。また、データベースの早期公開が期待される。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2 件以上	1 件	0 件	掲載論文数 2 件		A	
	・学会、研究会等での発表件数	1 件以上	——	0 件	発表件数 1 件		A	
	・データベースへのデータ入力件数	700 件以上	700 件未満 560 件以上	560 件未満	データ入力件数 700 件		A	
1－（２）－① ア 発掘調査及びそれらに関連する作業の手法・技術の開発・改良に関する調査・研究を行い、遺跡発掘の迅速化を図るとともに、深層遺構探査法や官衙遺跡発掘調査法の開発を進める。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・深層遺構探査法の開発状況 ・官衙遺跡発掘調査法の開発状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・『古代の官衙遺跡－発掘調査研究法－』の刊行に向けて、毎月総合研究会を開き、執筆作業を進めてきた。 ・発掘調査法の中の遺物調査に関する研究として、包含層出土瓦片の資料的価値を探る整理・分析法について鳥取県上原遺跡群出土瓦類を取り上げ、試験的に悉皆整理と分析を進めてきた。 ・官衙遺跡発掘調査法の開発研究の一環として、全国の官衙遺跡発掘データの収集・分析、データベース作成を進めている。 ・「官衙・集落と墨書土器」をテーマに研究集会を開催し、墨書土器における、記載位置や出土地などに注目した食器の整理・保管の問題や郡衙による供給活動の実態と駅伝制との関係に再検討が必要であることなどについて、研究報告を行った。また、12年度開催の研究集会「銚帯をめぐる諸問題」の報告論文・資料集を編集・刊行した。 ・深層遺構探査法の開発研究として、13年度においては福岡県・大刀洗町所在の下高橋官衙遺跡において、正倉院内の正倉建物や外郭の濠、同じく福岡県・久留米市の筑後国府遺跡では政庁域内の西脇殿と溝、門の遺構を地中レーダー探査によって特定するという画期的な成果をあげた。また、国際遺跡探査学会(ウィーン)で「Ground Penetrating Rader-a review and outlook」を発表するなどした。 (参考指標) ・収集資料数 508 件 ・調査・研究報告書等刊行数 1 件		A	発掘調査や出土遺物の調査・研究法の開発・改善の努力が続けられていることは、独創的かつ発展性があり十分に評価できる。瓦の整理法、官衙遺跡発掘データの収集・分析、墨書土器などの分析法の研究などは、日本の考古学の水準を高める重要な研究であり、その成果が広く一般の学会誌や学会などでも発表されることが望まれる。また、『銚帯をめぐる諸問題』の研究会とその報告書の刊行は、奈良文化財研究所の今まで研究されてきたものがベースとなって、様々な角度からみた全国的に網羅されたものとして高く評価されるとともに、今後の研究に広く利用されると思われる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	4 件以上	4 件未満 3 件以上	3 件未満	掲載論文数 5 件		A	
	・学会、研究会等での発表件数	4 件以上	4 件未満 3 件以上	3 件未満	発表件数 4 件		A	
イ	年輪から建築や美術の年代測定、自然災害の発生の確認を行	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			年輪年代測定法の開発研究として、今年度は弥生時代～中世までの出土木材を対象として実施し、中でも奈良県桜井市勝山古墳	A	年輪年代測定法の研究の推進は、奈良文化財研究所の独壇場であり、その成果は我が国の先進技術として独創性・発展性ともに

	う年輪年代測定法を開発する。	・年輪年代測定法の開発状況				出土の板材の年輪年代199年は、前期古墳の時代を考える上で、極めて貴重な年代情報となった。また、年輪年代学と考古学に関連した研究成果の一部を「Applications of Dendrochronolgy to Japanese Archaeology」と題しデンバー(米国)で開催された第67回全米考古学大会にて発表した。		高く評価され、時代を特定する基礎資料として、今後のあらゆる分野の研究に波及することが期待される。また、その成果の考古学への応用については広く考古学研究者との共同研究が望まれている。
		・学術雑誌等への掲載論文等数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	掲載論文数 1 0 件	A	
		・学会、研究会等での発表件数	2 件以上	1 件	0 件	発表件数 3 件	A	
ウ	研究のための資料となる考古資料、出土品、動植物遺存体等を全国各地から収集し、整理・分析することにより、遺物の分布状況、分類、編年及び当時の生活環境を解明する環境分析法を開発する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・生活環境分析法の開発状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			本年度は貝塚データベースについて、沖縄、中国、四国などの地域の研究者に依頼して校正を進め、一方で、原生動物骨格標本の作成とともに、各地公共団体等から依頼を受け、動物遺存体の同定、調査研究を実施した。中でも高知県居徳遺跡出土の獣骨類の同定を進める過程で、その内の15点は、殺傷痕、受傷痕を持つことを明らかにし、それらが縄文時代晩期に生じたことから、金属器を用いた集団間の抗争の可能性を提示した。金属器の証拠としては国内最古となり、集団間の抗争としても大きなニュースとなった。日本文化財科学会において「Ancient DNA解析から見た古代ブタの系統」などを発表した。	A	考古学の環境研究への期待は大きい。この分野でも奈良文化財研究所が独創性ある大きな成果を上げていることは十分に評価できる。人類の道具との関わり、加工技術を知る上での基礎資料となり、生活環境、時代など幅広い研究から、更に今後の成果が期待される。
		・学術雑誌等への掲載論文等数	1 6 件以上	1 6 件未満 1 2 件以上	1 2 件未満	掲載論文数 2 0 件	A	
		・学会、研究会等での発表件数	6 件以上	6 件未満 4 件以上	4 件未満	発表件数 6 件	A	
エ	保存科学及び考古科学に関する国際会議の開催により、「考古科学の総合的研究(COE)」のまとめを行い、研究報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・国際会議開催状況 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			平成13年度における各研究分野の研究過程の概要について 1 地中レーダーを用いた探査により、広域遺跡である郡衙において正倉院内部の総柱建物を5棟検出することに成功した。 2 動物遺存体の現生比較標本の作製、レーザーによる 3次元測定装置の応用から金属器の種類による加工痕の判別が出来る見通しがたった。 3 古年輪研究部門では、ヒノキの年輪幅は前年7月と8月および当年の 6月の気温との間に有意な負の相関が認められ、また降水量とでは前年の7月と12月及び当年の9月との間に有意な正の相関が認められた。 4 無機質遺物や有機質遺物などの考古資料を対象にした材質・構造調査から材料科学的及び製作技法の復元的研究を継続的に行っており、現在、古代ガラス材質の歴史の変遷に関しては、その全容が明らかになりつつある。また、国際会議として「INTERNATIONAL CONGRESS ON THE CONSERVATION AND RESTRATION FOR ARCHAEOLOGICAL OBJECTS 」と題して平成14年2月に3日間にわたり開催した。	A	保存科学、考古科学の分野で奈良文化財研究所が果たしてきた役割は大きい。課題どおりの多岐にわたる内容であるが、実際の考古遺物の保存処理、分析など現時点での先端的発見がなされたことは、今後の研究への発展性大なものとして十分に評価できる。特に大きな課題の出土木製品の保存技術、分析法、ならびに我が国では事例が少ない構造船の保存処理に関わる発表がなされたことは意義深い。目指す国際的な中核的存在意義を内外共に知らしめたものと思われる。
		・学会、研究会等での発表件数	1 件以上	——	0 件	発表件数 8 件	A	
		・調査・研究報告書等刊行数	1 件以上	——	0 件	刊行数 1 件	A	
1－(2)－②	文化財の彩色材料に関する非破壊測定法の実用化のための基礎研究を行い、得られた成果により、報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・画像形成技術の開発に関する研究として1)画像形成のルーチーンのフルカラー化及びデジタル化を図り機器類・作業手順等の大幅な見直しを図った。2)光に対する物性の検討として、文化財に使用される様々な色料が可視光域から赤外線域におよぶ波長域の光に対して、どのような特性を保有し、どのような理論のもとで、その特性の画像化が出来るのかについてすでに基本的条件の検討を終えた。3)光物性の画像化に関わる技術開発として絵の具層の表面から支持体にもっとも近い面までを断層的に撮影する基本的な技術を開発し、実際の調査で応用している。 ・美術工芸品の彩色に関する光学的調査研究として、国宝「源氏物語絵巻」の調査研究では、これまで過去3年間行ってきた同絵巻	A	最新技術を駆使し、源氏物語や仏像、絵馬などに適用し、従来では困難であった有機系の色材をも同定を試み、かつその結果技法や時代背景をつかもうとしている点等は、外部への公開を含め、独創性・発展性あるものとして十分に評価できる。現場での汎用な応用が期待される。

					の調査研究を継続し、徳川美術館蔵の 15面について2回の補充調査を行うとともにデータ解析のための研究会を開催し、平成15年度の報告書刊行を目指して、集積したデータの整理を行った。 非破壊調査法に関する調査研究として、1)可搬型の蛍光X線分析装置による、文化財の材質調査を行うとともに、この装置の改良型としてモノクロメータによる単色X線照射方式を検討し、従来に比べて軽元素の検出感度が向上する結果が得られた。2)非破壊測定法として化学発光法及びレーザーラマン法について情報収集を行った。3)研究会を平成13年6月22日に「文化財の劣化研究へのCL技術の応用可能性」を、同年12月10日に「非破壊による構造解析の限界」と題して開催した。		
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2 件以上	1 件	0 件	掲載論文数 5 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	6 件以上	6 件未満 4 件以上	4 件未満	発表件数 6 件	A	
イ 臭化メチル燻蒸代替法及び殺菌・防カビ法の開発に関する研究を行い、得られた成果により報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			1)種々の臭化メチル燻蒸代替法についての基礎研究として、低酸素濃度殺虫法、二酸化炭素による殺虫法や低温処理法などについて、その薬効や文化財材質への影響試験を行い、その成果を現場でできるように具体的な処理仕様案を策定してきた。今年度は、ロンドン等で開催された国際学会や国内学会等においてその成果を発表した。また、虫害の予防を主とした管理法についての研究成果を「文化財害虫事典」として編集・刊行した。2)臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会を「新規燻蒸剤の効力と性状」をテーマに平成13年9月18日に行った。 (参考指標) ・調査・研究報告書等刊行数 1 件	A	文化財害虫事典の発行は、虫菌害に悩まされる我が国にとっては、待たれた基本資料の 1 つであり、その独創性・有用性は十分に評価できる。また、国際的に最も緊急を要し、全国の博物館や資料館が待望している脱メチルブロマイドの燻蒸についても、具体的に成果が得られつつあり、一般での使用が期待できる有用的なものとして十分に評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	1 件以上	——	0 件	掲載論文数 2 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	2 件以上	1 件	0 件	発表件数 2 件	A	
ウ 文化財施設の保存環境に関する状況調査及び厳島神社や白杵磨崖仏等の劣化調査と環境計測を行い、周辺環境が文化財に及ぼす影響について調査・研究を進め得られた成果により報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・文化財施設の保存環境の研究として、1)昨年度に引き続き、山車、曳山、曳舟を収蔵展示している博物館の環境調査を行った。2)平成13年11月27日に、博物館の環境というテーマの研究会を行った。3)化学物質の滞留を明らかにする目的で、詳細分析・簡易分析法の検討を行った。今年度は、アクティブサンプリングでの詳細分析を行い、室内化学汚染物質の発生源について現場で検討した結果について学会発表を行い、成果を論文にまとめた。 ・周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究として1)白杵磨崖仏群において、次期修復事業のための基礎データ収集を目的として温湿度・降水量等の長期連続観測及び岩石表面の改質や生物制御のための材料の評価試験を行った。2)厳島神社において漆を原料とした新しい塗料を用いて修復した高舞台について、塗料の劣化状態の観察や温湿度・日照の計測など経過観察を行った。3)日光社寺群において山内全域を対象とした温湿度観測及び二酸化窒素濃度の観測を行った。4)韓国との共同研究として、石塔修復技術の情報提供及び韓国側研究者の来日・白杵における測定を通して技術交流を行った。 (参考指標) ・現地調査件数 23 件 ・調査・研究報告書等刊行数 1 件	A	博物館のみならず、現地の民俗文化財を収納する蔵や保管庫を対象とした調査、ならびに長期にわたり最も困難な課題である磨崖仏や、自然に晒された建造物群の過去の保存処置を含めた状況調査と環境などあらゆる角度から総合的に検討されていることは、高く評価できる。また、現地調査をしっかりと行っている点も、正確性の観点から十分に評価できる。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	7 件以上	7 件未満 5 件以上	5 件未満	掲載論文数 7 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	8 件以上	8 件未満 6 件以上	6 件未満	発表件数 8 件	A	
エ 大型木製品の劣化、有機質遺物の材質分析、無機質遺物の非破壊構造調査に関する研究を行い、それぞれの保存処理法及び調査法を開発する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・保存処理法の開発状況 ・調査法の開発状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			平成13年度は、1)MRIを応用した木製品の劣化状態を調査する方法の開発、2)木製品保存処理中のモニタリング法の開発、3)大型木製品に対する真空凍結乾燥法の応用研究、4)出土木製品の新規保存処理法としての超臨界点乾燥法の開発研究、5)出土木製品など保存処理を施した有機質遺物などを収蔵庫において簡易に保管できるシステムの開発、6)レーザーラマン分光法を用いた有機質遺物並びに無機質遺物に対する完全非破壊非接触分析法の確立、7)X線CR法によるX線透過撮影像のデジタル化と応用技術の開発を行った。また、有機質遺物及び無機質遺物の材質及び構造調査を行い、基礎的データの蓄積を行った。	A	それぞれの研究者の専門が生かされており、また保存処理ならびに分析法が先端的な開発の中にあって成果を得ており、今後に大いに期待できる発展性あるものと評価できる。

	・学術雑誌等への掲載論文数 ・学会、研究会等での発表件数	11件以上	11件未満 8件以上	8件未満	掲載論文数 13件	A	
		7件以上	7件未満 5件以上	5件未満	発表件数 17件	A	
オ 古糊などの伝統的な修復材料の素材の物性の解明を行い、文化財修復の新たな素材と技法の開発研究を行うとともに、レーザーによる文化財クリーニング法の開発のための研究を行う。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・文化財修復素材・技法の開発状況 ・文化財クリーニング法の開発状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・伝統的修復材料に関する調査研究として今年度は焼付漆及び古糊を中心に調査・研究を行った。1) 焼付漆に関しては、耐候性試験を実施し、屋外曝露試験では、すべてのサンプルで艶の減少が確認できた。劣化促進試験では、特にウェザーメーターでの艶の減少が著しかった。2)古糊の研究では、発酵条件の異なる古糊をサンプリングし、分子量分布測定や有機酸分析を行い、その結果古糊は原料である生麩糊に比べて分子量が数十分の一に落ちていること、この傾向は発酵条件が異なっても観察されること、原料のデンプンの分解物と思われる有機酸が検出されることなどが明らかになった。 ・レーザーによる文化財クリーニング法研究として、今年度はレーザー装置が整備され、クリーニング対象物の汚れの種類や色調の違いに対するレーザーの出力の差によるクリーニング効果の違いについて基礎的な試験を行った。その結果、石灰岩などの表面に付着する頑固な黒色汚れのクリーニング方法を確立できた。 ・焼損文化財の保存修復に関する研究として、従来行われていた漆を使用した強化法他に、文化財表面を破損することなく効率よく内部へ合成樹脂を含浸させ表面強化を図るための樹脂の選定、含浸方法の検討などを行った。その結果含浸方法については、従来行ってきた刷毛による樹脂の塗布に比べ、減圧含浸を行うことにより効率的な強化処理が出来ることが判明した。	A	伝統技術の中で、最も主要な位置を占める古糊の科学的研究が10年余の研究成果として解明されつつあることは継続性あるものとして十分に評価できる。今まで謎に包まれ、特殊な世界とされたものの解明は、単に科学的な解明に止まらず、文化財の長期的保存の在り方、倫理的な在り方を具体的に示すものであり、新しい技術の開発の源となりうると期待する。レーザーのクリーニングは、発展性ある新技術としてより一層、条件など具体的な実験が求められるよう。
	・学術雑誌等への掲載論文等数 ・学会、研究会等での発表件数	2件以上	1件	0件	掲載論文数 2件	A	
		1件以上	——	0件	発表件数 2件	A	
カ 古代遺跡の保存科学的研究を行い、保存修復指針及びデータベースを作成・公開する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・保存修復指針の作成・公開状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			今年度は、各種遺跡の中でも、その復原整備・環境整備の手法に多様性のある官衙遺跡を対象とし、保存整備状況や公開の実態を把握することを目的として、各都道府県にアンケート調査を行い、基礎資料収集につとめた。 ※15年度以降に研究成果公表予定 (参考指標) ・収集資料数 1,537 件	A	古代遺跡の保存科学的研究やその保存修復の指針の作成は、文化財研究所の最も重要な研究・実践課題の1つである。官衙遺跡の整備手法についての基礎資料の収集に努力がなされていることは、独創的かつ有用的であり十分に評価できる。一般市民の期待についてのアンケート調査や歴史・考古・美術などの関連研究者の意見聴取などの実践的研究の推進が望まれる。
キ 近代の文化遺産の保存修復に関する研究を行い、得られた成果により報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			今年度の近代の文化遺産の保存修復研究会では、大型金属船の保存修復を主題として、ヨーロッパの専門家から先進例の報告と国内の博物館から保存修復上の問題点などに関して多くの報告があり、今後船舶の保存修復を進める上で参考になる事例を収集した。また、大型機械類の保存や航空機の保存などの指導・助言、調査研究などを行った。	A	最も未知の分野の研究であり、かつ緊急性を要するものと思われる。海外の実施状況の調査、その報告を形として世に問うことの意義は大きいと思われ、その有用性・発展性は高く評価できる。しかしながら、この分野については課題が山積みしており、より広く活動を行うことを期待したい。
	・学会、研究会等での発表件数 ・調査・研究報告書等刊行数	2件以上	1件	0件	発表件数 2件	A	
		1件以上	——	0件	刊行数 1件	A	
1ー(2)ー③ ア 平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、「宮跡整備構想」に基づく具体的整備方針を再検討するとともに、全国各地の大規模な遺跡の整備及び管理状況について、情報収集を行い、調査・分析の結果について報告書を作成する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・文化庁が行う平城宮跡・藤原宮跡の整備公開活用に関する調査研究として、今年度は、第一次大極殿院地区の地形及び回廊の復原考察を行うため、回廊部における遺構変遷の詳細検討を行い、回廊の位置・方位・延長規模等についての数値的把握及び形状についての調査検討を行った。その結果、回廊の一部に方位的ずれが判明した。また、公開活用に関する調査研究では、各地の先行事例調査を実施し、復原建築における材料、意匠、活用事例等の調査を実施し、資料の収集を行った。 ・大規模遺跡の整備・活用・管理に関する調査と研究として今年度は北海道及び東北地区の大規模遺跡について現地調査を行いこれに基づき、①整備手法・技術、②維持管理、③学習的活用、④観光資源としての活用、⑤オープンスペース的活用、⑥地域の文化的施設としての活用、という6つの観点から現状と課題を取りまとめた。 (参考指標) ・情報収集調査件数 40 件 ・収集写真・図面・関連資料数 650 件	A	平城宮・藤原宮の整備復原のための基礎的な調査・研究が続けられていることは継続性・発展性の観点から十分に評価できる。ここでも、平城宮大極殿の復原という具体的課題に対する実践的研究が望まれる。

	・学術雑誌等への掲載論文等数 ・学会、研究会等での発表件数	2 件以上 1 件 0 件	掲載論文数 2 件	A A	
イ 出土遺構及び遺物の公開・活用 に資するため、遺跡の公開のための新たな保存法として、遺跡の露出展示法を開発する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・遺跡露出展示法の開発状況 ・学術雑誌等への掲載論文等数 ・学会、研究会等での発表件数	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施 1 件以上 —— 0 件 1 件以上 —— 0 件	遺跡露出展示法の開発研究として平成13年度は、岩石の劣化状況を調査するための基礎実験の一環として、冬季における岩石の表面温度の分布と変化をサーモグラフィにより調査したところ、温度分布の不均一性が岩石の劣化と関係する一因であることが示唆された。 掲載論文数 2 件 発表件数 1 件	A A A	遺跡の露出展示法の開発についての研究が着実に進められていると判断でき、有用であり十分に評価できる。
1－（3）－① ア 諸外国の文化財の保護制度に関する調査・研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施	文化財保存に関する国際情報の収集及び研究として、ドイツにある16州のうち、特に文化財保護制度が整備されているノルトラインヴェストファーレン州及びヘッセン州を対象として、文化財保護制度についての実地調査を行った。これにより、その特色ある制度を認識するとともに、日本の保護制度との対比において有益な調査を実施した。また、この調査研究に関連して、インターネット及び文献による資料収集と日本語への翻訳を実施した。 ※平成13年度からの新規事業のため、平成14年度以降に調査研究成果公表予定 (参考指標) ・収集資料数 10 件	A	調査・研究・国際協力が順調に進んでおり、その積極的取り組みは発展性あるものとして十分に評価できる。多くの研究と実際の遺跡での応用がなされているが、なかなか難しい問題である。
イ 東南アジアの文化財を取り巻く自然環境とレンガ等材料の劣化原因に関する共同研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況 ・学術雑誌等への掲載論文等数 ・学会、研究会等での発表件数	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施 2 件以上 1 件 0 件 3 件以上 3 件未満 2 件以上 2 件未満	・文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査・研究の基礎研究として硫酸ソーダ水溶液浸漬と乾燥を繰り返して劣化させたレンガの吸水率を測定する方法により、レンガの塩類風化と吸水率の変化に関する研究を行っているが実験には長時間を要する。また、国内のレンガ造り文化財の調査、研究として碓氷峠関連鉄道施設におけるレンガの劣化状況を観察し、その原因を考察した。これによると凍結と塩類風化の両方が同時に起きている状況が考えられ、両者の破壊力や劣化への関与の仕方の違い等継続した調査を行っている。一方、国外においても、タイのアユタヤ遺跡のマハタート寺院において、塩類風化の著しい歴史的構造物を模したレンガ縮小模型を2基構築して、現地実験を行っている。 ・文化財保存修復に関する国際共同研究として、アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡を研究サイトとして特に劣化の著しい部位の特殊環境の計測と解析及び外観が著しく変化した石彫レリーフのクリーニングと保護処置を行うこととし当地において温度、湿度、日照強度などの測定機器を設置し計測を開始した。また、日本・タイの共同研究の成果として第2回日・タイ共同セミナーを開催し発表と討議を行った。 (参考指標) ・収集資料数 24 件 ・調査・研究報告書等刊行数 1 件 掲載論文数 7 件 発表件数 4 件	A A A	調査・研究・国際協力が順調に進んでおり、その積極的取り組みは発展性あるものとして十分に評価できる。基礎的研究と実際の保存ならびに保存処置とを融合させることは、なかなか困難であるが、目前の成果のみならず、将来を見据えた研究が進展することを期待する。
ウ 中国及び中南米諸国との文化財の保存修復に関する調査・研究と技術移転・人材育成の実施	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施	・敦煌莫高窟壁画の保存修復研究において、中国版の壁画修復履歴管理システムが完成し、敦煌において試験運用を行うとともに保存研究所のスタッフに対して研修会を行った。また、粘土を主体として作られた壁画壁の保存には、粘土中の水分移動について注目して研究を行う必要があることが判った。 ・中国文化財保存修復に関する調査・研究の一つとして龍門石窟研究院から毎年1名、保護研究室の研究員を受け入れ研修を実施している。また、龍門石窟研究院、国家文物局に委嘱された中国側専門家、河南省及び洛陽市の文物局の担当者と意見を交換し、ユネスコ北京事務所と共同で最終的な作業計画を決定した。 ・中南米諸国文化財保存協力事業として、①パナマ文化庁との研究交流合意書の締結、②パナマ人専門家の招へい、③教会石造ファサード修理計画の策定、④木造建築修復計画の策定などを実施した。 ・ユネスコの行う中国クムトラ千仏洞の調査研究協力において平成13年 8月にユネスコのミッションとして本事業の調査研究に	A	調査・研究・国際協力が順調に進んでおり、その積極的取り組みは発展性あるものとして十分に評価できる。

			協力した。専門家による討議の結果①新疆ウイグル自治区クチャ県に位置し、現在112の洞窟が残存している。②クムトラ千仏洞はクチャ県の西北25キロメートルの渭千河出口東岸の雀勒塔格山岸壁に作られている、③地層は、第4紀層で、土と礫石の堆積層をなしている。④千仏洞は震度8の地震に対応しうる保存対策が求められている。⑤典型的な、中温帯大陸性乾燥気候である。⑥千仏洞は、5世紀から11世紀のものとされ、600年あまり造営歴史が続いたところである、などが判明した。				
			(参考指標) ・収集資料数 8 件 ・調査・研究報告書等刊行数 2 件 ・研修生受入人数 3 名 (龍門 1名、パナマ 2名)				
	・学術雑誌等への掲載論文等数	2 件以上	1 件	0 件	掲載論文数 4 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	発表件数 6 件	A	
エ 地理情報システムを利用した文化財の防災計画に関する共同研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			※平成15年度から研究開始予定であるため実績なし		
オ 在外日本古美術品修復についての諸外国の博物館・美術館との協力事業及び研究機関・専門家との学術交流	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・在外日本古美術品保存修復協力事業として、継続修理を含む絵画6件、工芸品77件を修復した。また、これらの修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。 ・文化財保護に関する日独学術交流として、平成13年8月3日から4日までバイエルン州立文化財研究所において「日本とドイツにおける歴史的彩色」の共同研究会を、同年12月1日に東京文化財研究所において「彩色文化財に関する日独共同研究会」を開催した。 ・スミソニアン研究機構との国際研究交流として、東洋絵画に用いられている色料について研究交流を行い、3月にフリア美術館のウィンター氏と東京文化財研究所において、彩色材料の分析について討議し、情報交換を行った。 (参考指標) ・専門家等の受入人数 1人 (スミソニアン研究機構との国際交流事業) ・専門家等の派遣人数 1人 (文化財保護に関する日独学術交流)	A	調査・研究・国際協力が順調に進んでおり、その積極的取り組みは発展性あるものとして十分に評価できる。目的、内容ともに適切で、優れた成果が上がっている。
	・事業件数	2 件以上	1 件	0 件	修理作品の所蔵博物館等への事前調査数 2 件	A	
	・修復件数	5 件以上	5 件未満 4 件以上	4 件未満	修理作品数 10 件 (83点)	A	
カ 環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査・研究	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査研究として、カンボジア王国シエムリアップ市において、タニ窯跡群の調査を継続して行い、今年度は現地での発掘が終了した後をうけて、出土陶器類の整理作業を進めた。また、チリ・イースター島のモアイ石像の保存調査においては、現地で採取した石材のサンプルに使用した含浸薬剤性能をより詳細に把握するために本年度暴露試験に供した均質石材サンプルの風化程度を分析することにより、イースター島の環境に適合した含浸薬剤を選定することが可能となるものである。 (参考指標) ・現地調査実施件数 2 件	A	劣化の状態が、暴露試験や現物の調査で解明でき、環境との関連性がみえてきたことは研究の成果が表れたものとして高く評価できる。国際的な長年の共同研究により一層その成果が期待される。
	・学術雑誌等への掲載論文等数	1 件以上	——	0 件	掲載論文数 1 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	1 件以上	——	0 件	発表件数 2 件	A	
キ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、古代庭園及び陶磁器に関する調査研究及び研究協力	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、古代庭園及び陶磁器に関する調査研究及び研究協力において、①中国社会科学院考古研究所との共同研究:平成8年から実施してきた漢長安城桂宮の共同発掘調査も終了し、本年度は双方報告書作成準備に取りかかった。②中国遼寧省文物考古研究所との共同研究:これまでの共同研究成果公表の一環として、中国側は図録「三燕文物精粹」の編集に取りかかり、日本側も中国側からの資料提供により、日本語版図録作成の準備に入った。③中国河南省文物考古研究所との共同研究:これまでに行われた黄冶唐三彩窯跡の発掘調査、試掘調査出土唐三彩を資料化し、図録として公開するため両国の研究者が共同で作業に	A	中国社会科学院考古研究所との漢長安城の共同調査をはじめとする、中国との共同研究の推進は、日中の学術交流や考古学の調査・研究法の相互の前進のためにもきわめて意義のある有用的な事業であり、高く評価できる。図録の出版など実質的成果も認められる。

			あたり、年度末には中国版図録「鞏義黃冶唐三彩」を出版した。				
			(参考指標) ・収集資料数 400 件 ・現地調査実施件数 5 件 ・研究者等の受入人数 20 人 ・研究者等の派遣人数 32 人				
	・学術雑誌等への掲載論文等数	5 件以上	5 件未満 4 件以上	4 件未満	掲載論文数 5 件	A	
	・学会、研究会等での発表件数	2 件以上	1 件	0 件	発表件数 7 件	A	
1－(3)－② ア 文化財保存修復研究国際センター(I C C R O M)と共同で国際修復研修事業を実施する。	・研修実施実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			国際研修「漆の保存と修復」として、研修のための英文テキストを作成し、参加者に配布した。研修内容は、講義7単元(①世界の漆、②漆の歴史、③科学から見る漆、④漆の保存修復、⑤花鳥螺鈿食籠の保存修復、⑥鳳凰蒔絵螺鈿矢筒の保存修復、⑦黒漆兜の保存修復)となっており、塗装工程手板、蒔絵手板、螺鈿手板などの製作演習などを行った。	A	漆の伝統的な世界のみならず、全体的な説明、テクニカルタームに加え、化学的な基礎を研修されていることは、有用的であり十分に評価できる。また、研修者も各地から訪れており、研修の意義は大きいと思われる。漆の保存・修復に関する英文テキストの刊行など、日本の文化財保存・修復技術の海外移転が順調に進められている。
	・受講者数	8 人以上	8 人未満 6 人以上	6 人未満	受講者数 9 人	A	
	・受講者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果(満足数／回収数) 8 5 %	A	
	・アンケート結果の研修内容・方法充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			平成14年度は、「紙の保存と修復」のテーマで研修を実施するが、アンケート結果を踏まえて、実技の時間数などの調整に反映する。	－	
イ 文化財の保存・修復に関する国際シンポジウムを実施する。	・シンポジウム開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			「日本の楽器－新しい楽器学へ向けて－」と題して平成13年11月13日から15日まで3日間、日本の伝統楽器を対象として、研究集会を行った。音楽の立場から研究対象とされてきた楽器を、美術工芸品や絵画資料を用いた画像学的研究、古楽器の修復や博物館での展示など様々な視点からとらえ直し、海外の研究者を交えて「文化遺産」としての楽器の意義を問い直そうと試みたもので、付帯事業として、東京国立博物館の所蔵楽器120点あまりの展覧も合わせて行った。 ※参加者数が例年より少ないのは、会場のキャパシティ(約100名)の関係である。東京国立博物館所蔵の楽器展覧を付帯事業として日程に組み込んだため、会場を当研究所セミナー室にせざるを得なかった。	A	楽器を、文化遺産としてとらえ、あらゆる角度から取り組まれていることは、独創的かつ発展性あるものとして十分に評価できる。また、東京国立博物館の所蔵する楽器の展示がなされたことも画期的なことと思われる。会場の制約からくる参加者数の問題は、今後の問題として考慮すべきと思うが、今回それに左右されるものではないと思われる。
	・参加者数	1 7 0 人以上	1 7 0 人 未満 1 4 0 人以上	1 4 0 人 未満	参加者数 1 1 4 人	C	
	・参加者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果(満足数／回収数) 9 7 %	A	
ウ アジア文化財保存セミナーを実施する。	・セミナー開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			アジア各国の文化遺産保護制度について、制度の骨格となる法律の条文が意味する内容、機能、そして制度が構築された歴史などの比較検討を行い、それぞれの特徴を明らかにした。平成14年3月18日から22日まで東京文化財研究所において「各国の文化遺産保護制度－その国際比較－」として会議を行った。	A	文化財保護制度という抽象的、理念的な課題であったにもかかわらず、満足度100%という参加者のアンケート結果からも、担当者の努力がうかがわれ、十分に評価できる。また、アジア各地域の文化財保護制度を取り上げたことは意義深い。これを皮切りに、5年後の成果を期待したい。
	・参加者数	1 0 人以上	1 0 人 未満 8 人以上	8 人未満	招へい外国人・国内専門家数 1 5 人	A	
	・参加者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果(満足数／回収数) 1 0 0 %	A	
エ 国際文化財保存修復研究会を実施する。	・研究会開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			国際文化財保存修復研究会を、平成13年10月18日に「地域社会と文化遺産Ⅰ:民族、宗教、政治」と題して開催し、平成14年2月22日に	A	本研究会の従来の直接的なテーマではなく、文化財ならびにそれらの保存修復の基盤となる基層部分をテーマとしたことは、重

						は「地域社会と文化遺産Ⅱ：民俗、言語、異文化理解」と題して開催した。			要であり、将来に向けて発展する基盤づくりとして優れたものと思われる。国際的な文化財保護の理念を問うこうした取り組みが意欲的に行われていることは、高く評価できる。
		・参加者数	100人以上	100人未満 80人以上	80人未満	参加者数 第10回 86人 第11回 57人	A		
		・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 第10回 88% 第11回 85%	A		
オ 国際協力事業団、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所等が実施する研修への協力を行う。	・研修への協力状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・日本学術振興会外国人特別研究員の受け入れとして、日本学術振興会の助成で、平成13年9月から平成15年9月までの予定で、中国ハルビン建築大学講師の孫喜山氏を招へいた。 ・龍門石窟研究院研究員の受け入れとして、文化財保護振興財団の助成を受けて、同院の石窟技術保護室の研究員馬朝龍氏の研修を平成12年10月から開始し、平成13年9月に所定の内容を修了し帰国した。 ・国際協力事業団、ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所等の研修事業への協力として、①モロッコ国カウンターパート研修（研修生1名、講師8名）、②ユネスコ青年交流信託基金事業（研修生10名、講師3名）、③アジア・太平洋地域文化遺産保護調査修復研修（研修生13名、講師11名）、④アジア・太平洋地域文化遺産保護に関する調査修復担当外国人招へい研修事業（研修生2名、講師2名）を行った。 日本学術振興会外国人特別研究員 1人 龍門石窟研究所研究員 1人			A	文化財保護のための国際協力の一環として、文化財保護技術者の研修事業はきわめて重要であり、適切に行われ有用的なものとして、十分に評価できる。さらに多人数の研修受け入れが期待される。
1－（3）－③ 職員を外国に派遣し、文化財保存修復に関する指導・助言・協力及び国際研究交流を実施する。	・指導・助言・協力状況 ・研究交流実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			文化財保存修復に関する海外派遣として、平成13年度は、①中国甘肅省・炳靈寺涅槃塑像の保存修復、②ホンジュラス共和国「第2回コパン考古公園保存に関する専門家会議」に参加し、共に技術指導及び協力を行った。			A	24名もの職員の依頼に基づく派遣は、国際的な文化財保存・修復事業に文化財研究所が大きな役割を果たしていることを示すもので、有用的であり高く評価できる。
	・職員派遣数	9人以上	9人未満 7人以上	7人未満	依頼により職員を外国に派遣した件数 24人			A	
1－（3）－④ 国内においても文化財の保存科学等の分野において、各種研究機関・民間企業等との共同で調査・研究を行う。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・科学技術振興事業団との共同研究による文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法としての実績と成果は次のとおりである。①平成13年11月にMIHO MUSEUMで開催された「龍門石窟展」に出品されていた龍門石窟研究所所蔵の石造宝冠如来像を3次元デジタルセンサーによって計測し、立体画像を作成した。②12月に白杵磨崖仏の3次元デジタルセンサーによって計測し、立体画像を作成した。③平成14年2月に歴史地区カスコ・アンティコ（パナマ）にあるメルセーデ教会堂正面の劣化した石造ファサードを 3次元デジタルセンサーによって計測し立体画像を作成した。④3月にアユタヤ遺跡内ブラ・シー・サンベット寺院のレンガ壁面の劣化状況、スコータイ遺跡のワット・シー・チャム寺院の大仏等を3次元デジタルセンサー によって計測し、立体画像を作成した。 ・保存科学の共同研究として、①「超臨界点乾燥法による有機質遺物の新規保存処理法の開発」では、薬剤含浸と乾燥を超臨界状態で連続して行う方法を開発した。②「アコースティックエミッションを用いた出土木材保存処理モニタリング法の開発」では、出土木材のポリエチレングリコール含浸処理中および真空凍結乾燥処理中の変形をモニタリングするためのシステムとしてアコースティックエミッション法を適用することが出来るかどうかを検討したところ、ポリエチレングリコール含浸中及び真空凍結乾燥中にAE波を有意に検出できることが明らかになった。③「木炭を利用した埋蔵文化財の保管」では、出土木製品など保存処理を施した有機質遺物などを収蔵庫などにおいて簡易に保管できるシステムとして木炭を利用する方法を開発した。④「出土近世漆器の保存処理に関する基礎的研究」では、保存処理において変色・退色の著しい緑色漆の問題について、近世緑色漆器の着色技法として石黄が含有されていることを明らかにした。 (参考指標) ・学術雑誌等への掲載論文等数 6件 ・学会、研究会等での発表件数 5件			A	文化財の保存科学や技術の開発において、各種研究機関との共同研究が意欲的に進められており、有用的かつ効率的なものとして十分に評価できる。他業種で開発された技術を文化財へ適用する手段として、共同で実施することの意義は大きい。MRI、アコースティックエミッションの出土木材の保存時のモニタリングは、保存処理時の変形や割れを監視するシステムとして期待したい。大学との共同研究についても期待したい。
1－（3）－⑤	・目的・内容の適切性	定性的評価を記述し、委員の協			（東京文化財研究所）			A	従来から両研究所とも、外部からの様々な求めに応じ、文化財

外部機関等からの求めに応じ、文化財の保存・修復に関する実践的研究を実施する。	・調査・研究実施状況	議により、評定を実施	①萬鉄五郎データベース・コンテンツ制作、②愛知県幡豆郡幡豆町西川原1号墳出土青銅資料の自然科学的分析、③愛知県豊田市寄元3号墳出土の青銅資料の自然科学的分析、④春日市立石遺跡出土青銅器の鉛同位体比ならびに青銅器成分分析、⑤静岡県磐田郡豊岡村西の谷遺跡出土敷地3号銅鐸の自然科学的研究、⑥室町時代の文房具の保存・修復に関する調査研究、⑦剥落止めの材料に関する調査研究、⑧吉野ヶ里遺跡出土文化財の保存修復研究、⑨琉球漆器における保存と修復技法に関する調査研究、⑩装こうに使用する水について、⑪特別史跡白杵磨崖仏（大日石仏）保存環境測定調査、以上11件について研究を行った。 (奈良文化財研究所) 今年度は、①加茂岩倉遺跡より出土した銅鐸5点の保存処理にともなう事前調査と保存処理を実施し、報告書を作成した。②平原遺跡より出土した青銅鏡8点の事前調査と保存処理を行い報告書を作成した。③京都市埋蔵文化財研究所より委託された鹿苑寺出土修羅を真空凍結乾燥のための前処理溶液に浸漬し、定期的に修羅の形状変化などの有無についてモニタリングを行った。④岡山県総社市教育委員会からの委託研究では、鬼ノ城跡土塁復原に際する強化工法の開発研究を行った。⑤鳥取県教育委員会からの委託研究である妻木晩田遺跡における大型住居跡の露出保存に関する工法研究では、現地の遺跡から同類の土壌を取り寄せ、これを角型の筒状の金属枠に土を詰め、珪酸エステル・エポキシ系樹脂・イソシアネート系樹脂等で強化した後、現地において暴露試験を開始した。⑥広島市平和記念資料館からの委託研究である同資料館所蔵の各種被爆資料の分析と保存に関する研究では、被爆した衣類の繊維を分析することによって、その劣化現象を解明し、その保護対策を検討することとした。以上6件について研究した。 (参考指標) ・受託件数17 件 ・収集資料数16 件 ・学会、研究会等での発表件数1 件	の具体的・実践的な保存・修復研究を行ってきた。テーマとしては重要なものであって、文化財研究所の存在意義を示すものとして十分に評価できる。芸能などの分野でも期待したい。なお、受託業務については、契約に伴う守秘義務によりその成果が公表できないものもあることにより、評価に限界が生じる点で、課題を残していると思われる。	
1－（3）－⑥ 地方公共団体との共同による発掘調査を実施する。	・目的・内容の適切性 ・調査・研究実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	今年度は、共同による発掘調査は行っていない。		
2 調査・研究に基づく資料の作成・公表 2－① ア 研究報告書、年報、研究論文集、図録等を12年度の実績以上刊行する。	・内容の充実状況 ・刊行の適時性	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施	・「美術研究」374、375、376号を刊行した。 ・「日本美術年鑑」の平成12年度版を、平成11年美術界年史・美術展覧会・美術文献目録(定期刊行物所載文献・美術展覧会図録所載文献)・物故者という内容により刊行した。 ・「芸能の科学」を浄瑠璃と歌舞伎における知盛像の変遷などの論考からなる内容により第29号を刊行した。 ・定期刊行物「保存科学」の第41号を、国宝源氏物語絵巻に見られる彩色材料について他16件の論文を掲載し、発行した。 ・広報企画事業として、「東京国立文化財研究所年報2000年度版」、「東京文化財研究所概要2001年度版」、「東文研ニュース(№5～8)」について発行した。 ・文化財に関する初めての害虫事典で、加害された材質からの害虫検索や、各害虫の実物大イラスト・豊富な被害状況のカラー写真により、害虫と被害の具体的イメージがつかめることなどが特徴である「文化財害虫事典」を編集し、刊行した。 ・文化財保護法 50周年国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」の報告書を英文にて編集し、刊行した。 ・第7回アジア文化財保存セミナー「アジア諸国の世界文化遺産－持続的発展と保存－」の報告書(英文)を編集し刊行した。 ・第8回アジア文化財保存セミナー「アジア地域の世界文化遺産－考古遺跡の活用しながらの保存－」の報告書(英文)を編集し刊行した。 ・平成13年2月26日に開催した第9回国際文化財保存修復研究会における3件の事例報告と総合討議を編集し、刊行した。また、2001年10月18日に開催した第10回国際文化財保存修復研究会における3件の講演と総合討議に第8回国際文化財保存修復研究会での事例報告1件を追加して編集し刊行した。 ・「文化財保存修復研究会協議会報告書（主題：光学的方法の明日）」を刊行し、文化財の非破壊調査の最新技術を紹介した。 ・平成13年9月11日に、「民俗芸能の記録作成の方法と活用について」をテーマに開催した第4回民俗芸能研究協議会の事例発表・総合討議等の内容を「第4回民俗芸能研究協議会報告書」を刊行した。 ・「近代歌舞伎と写真メディア」、「近代上方歌舞伎の伝承」など、平成9年度からの特別研究で行ってきた研究成果をまとめた、	A	いずれも優れた資料を積極的に刊行、公開したもので有用であり十分に評価できる。奈良文化財研究所関係では、『山田寺発掘調査報告』が刊行された。7世紀中葉に創建された古代寺院の長年にわたる発掘調査の報告で、古代史、考古学、美術史などの研究に裨益するところが多い。年報も、その年度の調査研究の成果が速報されており、関係諸学の研究者に重宝されている。今後は各刊行物の利用成果などの検証について、検討されることを期待する。

					「近代歌舞伎の伝承に関する研究」報告書を刊行した。 - 東京文化財研究所に所蔵されている X線フィルムのうち漆製品などの工芸品をデジタル映像に変換して保存をはかるとともにそれらを整理して目録を作成、刊行した。 - 東京文化財研究所が保管する明治期に日仏間で活動した美術商林忠正宛の書簡の読みおこし作業を行い、その成果報告を「林忠正宛書簡集」として刊行した。 - 大正期を中心に明治40年から昭和 5年にかけて開催された美術展覧会の出品作品をインデックスとして編集し、作家別の索引も付して、複数の展覧会にまたがる出品状況も一覧でき、かつ、大正期の美術を作品データを通して総覧できる基礎資料として「大正期美術展覧会出品目録」を作成した。 - 所蔵目録出版等として平成13年度は第一冊目として、旧美術研究所初代所長矢代幸雄の蔵書を中心とする「東京文化財研究所所蔵目録1 西洋美術関係 欧文編・和文編」を刊行した。 - ユネスコ「無形文化遺産の保存に関する国際ワークショップ」報告書(英文)を刊行し、関係者に配布した。 - 地方巡回展として、宮城県美術館において、「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催し、同展にちなみ図録を刊行した。 - 研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行として今年度は「奈良文化財研究所紀要2001」、「奈文研ニュース」、「埋蔵文化財ニュース」、研究報告書として「山田寺発掘調査報告」他、図録等として「遺跡を探る」他、資料等として「法隆寺古絵図集」他を刊行した。 (参考指標) <table><tr><td>・定期刊行物配布部数</td><td>2,566 部</td></tr><tr><td>・年報配布部数</td><td>3,700 部</td></tr><tr><td>・研究報告書・研究論文集配布部数</td><td>12,599 部</td></tr><tr><td>・図録配布部数</td><td>20,310 部</td></tr><tr><td>・ニュースの配布部数</td><td>17,900 部</td></tr></table>	・定期刊行物配布部数	2,566 部	・年報配布部数	3,700 部	・研究報告書・研究論文集配布部数	12,599 部	・図録配布部数	20,310 部	・ニュースの配布部数	17,900 部																																
・定期刊行物配布部数	2,566 部																																														
・年報配布部数	3,700 部																																														
・研究報告書・研究論文集配布部数	12,599 部																																														
・図録配布部数	20,310 部																																														
・ニュースの配布部数	17,900 部																																														
	<table><tr><td>・定期刊行物刊行数</td><td>4 件以上</td><td>4 件未満 3 件以上</td><td>3 件未満</td><td>定期刊行物のタイトル数</td><td>4 件</td><td>A</td></tr><tr><td>・年報刊行数</td><td>2 件以上</td><td>1 件</td><td>0 件</td><td>年報の刊行数</td><td>2 件</td><td>A</td></tr><tr><td>・研究報告書・研究論文集刊行数</td><td>1 6 件 以上</td><td>1 6 件 未満 1 2 件 以上</td><td>1 2 件 未満</td><td>刊行物のタイトル数</td><td>2 8 件</td><td>A</td></tr><tr><td>・図録刊行数</td><td>3 件以上</td><td>3 件未満 2 件以上</td><td>2 件未満</td><td>刊行物のタイトル数</td><td>8 件</td><td>A</td></tr><tr><td>・ニュースの刊行数</td><td>5 件以上</td><td>5 件未満 4 件以上</td><td>4 件未満</td><td>刊行物のタイトル数</td><td>9 件</td><td>A</td></tr><tr><td>・新聞、雑誌等への寄稿及び資料提供数</td><td>2 0 0 件 以上</td><td>2 0 0 件 未満 1 6 0 件 以上</td><td>1 6 0 件 未満</td><td>記事掲載件数、取材・インタビュー件数</td><td>3 6 7 件</td><td>A</td></tr></table>	・定期刊行物刊行数	4 件以上	4 件未満 3 件以上	3 件未満	定期刊行物のタイトル数	4 件	A	・年報刊行数	2 件以上	1 件	0 件	年報の刊行数	2 件	A	・研究報告書・研究論文集刊行数	1 6 件 以上	1 6 件 未満 1 2 件 以上	1 2 件 未満	刊行物のタイトル数	2 8 件	A	・図録刊行数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	刊行物のタイトル数	8 件	A	・ニュースの刊行数	5 件以上	5 件未満 4 件以上	4 件未満	刊行物のタイトル数	9 件	A	・新聞、雑誌等への寄稿及び資料提供数	2 0 0 件 以上	2 0 0 件 未満 1 6 0 件 以上	1 6 0 件 未満	記事掲載件数、取材・インタビュー件数	3 6 7 件	A				
・定期刊行物刊行数	4 件以上	4 件未満 3 件以上	3 件未満	定期刊行物のタイトル数	4 件	A																																									
・年報刊行数	2 件以上	1 件	0 件	年報の刊行数	2 件	A																																									
・研究報告書・研究論文集刊行数	1 6 件 以上	1 6 件 未満 1 2 件 以上	1 2 件 未満	刊行物のタイトル数	2 8 件	A																																									
・図録刊行数	3 件以上	3 件未満 2 件以上	2 件未満	刊行物のタイトル数	8 件	A																																									
・ニュースの刊行数	5 件以上	5 件未満 4 件以上	4 件未満	刊行物のタイトル数	9 件	A																																									
・新聞、雑誌等への寄稿及び資料提供数	2 0 0 件 以上	2 0 0 件 未満 1 6 0 件 以上	1 6 0 件 未満	記事掲載件数、取材・インタビュー件数	3 6 7 件	A																																									
イ 1 4 年度に奈良文化財研究所の創立 5 0 周年事業としてこれまでの研究成果を総括し、特別展示・出版事業を行い、国際シンポジウムを開催するとともに、巡回展を開催する。	・特別展示実施状況 ・出版物刊行状況 ・国際シンポジウム開催状況 ・巡回展開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施	平成 1 4 年度実施事業であるため今年度は実績なし																																												
ウ 公開学術講座、公開講演会、現地説明会を開催する。	・公開学術講座開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施	・美術史研究の成果を「美術部オープンレクチャー」を「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の一環として公開し、第1回「着装する仏像ー仏像と人形のあいだー」(平成13年10月20日開催)、第2回「明治絵画再考ー青木繁を中心にー」(平成13年10月27日開催)、第 3回「エドワード・モースと蜷川式胤ー明治初期の美術研究と交流ー」(平成13年11月3日開催)の講演を行った。 ・芸能部夏期学術講座 (東京文化財研究所芸能部が毎年夏期に大学院生を対象に行う学術講座)を平成13年7月16日から19日までの4日間「歌舞伎の基礎資料ー研究史と展望」と題し開催した。 ・一般を対象として、古典芸能・民俗芸能等について研究成果を発表するものとして「公開学術講座」(東京文化財研究所芸能部主催)を、「変身の技法ー能と浄瑠璃に見る菅原道真ー」と題して、平成13年12月20日東京・神楽坂の矢来能楽堂で開催した。	B	公開学術講座が活発に実施されており、アンケート結果などもそれぞれ好評であるが、さらに国民への公開の視点に立った内容の拡充を期待する。																																										

				(参考指標) ・公開学術講座開催回数 3 回			
	・参加者数	390人以上	390人未満 310人以上	310人未満	参加者数 美術部オープンレクチャー 153人 芸能部夏期学術講座 42人 芸能部公開学術講座 230人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 美術部オープンレクチャー 87% 芸能部夏期学術講座 100% 芸能部公開学術講座 98%	A	
	・公開講演会開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			第88回公開講演会として平成13年6月16日に「復原された東院庭園隅楼」他の講演を実施した。その他第89回公開講演会、飛鳥資料館特別講演会、長安城日中共同発掘調査記念講演会を実施した。 (参考指標) ・公開講演会開催回数 4 回	B	公開講演会が活発に実施されており、アンケート結果なども好評であるが、さらに国民への公開の視点に立った内容の拡充を期待する。東西両研究所が1つの組織になったメリットをこうした点でも生かし、国民的関心を呼ぶ奈良や飛鳥における考古学的調査の成果などについて、東京など関西以外の地域でも報告会・講演会などを開催する意義は大きいと思われる。
	・参加者数	350人以上	350人未満 280人以上	280人未満	参加者数 530人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 100%	A	
	・現地説明会開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			発掘調査現地説明会として「平城宮跡第325次(興福寺中金堂)発掘調査」他の説明会を順次開催し、国民が適時適切に調査研究の成果を入手できるよう努めた。 (参考指標) ・現地説明会開催回数 6 回	A	現地説明会が活発に実施されており、アンケート結果なども好評で、十分に評価できる。奈良文化財研究所らしさが見受けられ、多くの成果を上げていると認められる。
	・参加者数	3,000人以上	3,000人未満 2,400人以上	2,400人未満	参加者数 4,930人	A	
	・参加者満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 100%	A	
エ 調査・研究の成果としてのデータベースを順次公開する。	・データベースの公開状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			(東京文化財研究所) ・和漢書データベース、売立目録データベースをインターネットにより公開した。 (奈良文化財研究所) ・文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、所外の研究状況についての情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。11月には公開シンポジウムにおいて「全国遺跡データベースの構築 2001年度の動向」と題し、遺跡データベースにおける重複遺跡の扱いについて研究成果を得た。また、遺跡地図情報システム研究会等を開催し、最新の測量技術及び遺跡GIS等についての研究報告、意見交換を行った。 ・木簡データベース、全国遺跡データベース、古代・地方官衙・居宅寺院関係遺跡文献データベースをインターネットにより公開した。 ※平成14年度から調査・研究の成果として作成、公開予定 (参考指標) ・データベース作成数 7 種類 ・データベース公開数 5 種類 ・データベース利用件数 34 種類	B	データベースの構築・公開については、木簡データベースなど、学術研究上大きな役割を果たしており、有用的であり評価できるが、まだ外部公開されていないデータベースについても、可能な限り早期の公開を期待する。
オ 黒田記念館、飛鳥資料館、平城宮跡資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室における展示・	・黒田記念館展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・平成13年 1月より、二階部分の改修工事が行われ、従来の黒田記念室に加え、会議等に使用していた陳列室も展示室に改修され、二室がギャラリーとなり、黒田清輝の作品を約50点展示するこ	B	黒田記念館の改修と再公開の準備等の努力は概ね評価できる。ただし、依然として平日週1回の公開では、観客を限定する事になるので、さらなる公開への努力を期待したい。

公開を充実させ、入館者数を12年度の実績以上確保するよう努める。				とが出来るようになった。また、旧美術研究所所長室も公開のスペースに改め美術研究所時代の写真を展示するとともに、パーソナルコンピューターを設置し、来館者にホームページを閲覧できるコーナーを設けた。 ・黒田清輝の作品を多数所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、併せて地方文化の振興に資するために昭和52年からの事業として、「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において開催してきた。平成13年度は宮城県美術館において7月19日から9月2 日の期間で開催した。 ・所蔵作品の貸与として松山市立子規記念博物館へ作品「パリー風景」、「残雪」を、高知県立文学館へ作品「裸体・女」を、東京国立近代美術館へ作品「湖畔」を貸与した。 (参考指標) ・公開日数 31 日 ・作品貸出数 3件4点 ※平成13年度の入館者数は、12年度の入館者数(3,439人)を下回ったが、これは、9月まで改修工事の関係で公開を休止していたためであり、再開後の平均入館者数は12年度と比べて増加している。		
	・入館者数	3,500人以上	3,500人未満 2,800人以上	2,800人未満	入館者数 2,743人	C
	・入館者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果(満足数/回収数) 93%	A
	・アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			公開については、多くの入館者から高い評価を得ているが、公開日については、次年度から木曜日に加え、土曜日も公開することを検討している。	—
	・飛鳥資料館展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			通年の常設展の他、特別展を2回、速報展を2回開催した。 (特別展) 「遺跡を訪ねる」(5月15日から7月1日) 近年、発掘によらず遺跡の中身を探る方法として注目を浴びている遺跡探査の歴史と現状の展示。 「飛鳥のイメージ」(10月30日から11月11日) 復元模型による飛鳥の理解の歴史をたどり、これまでに制作された復元模型や、復元ジオラマの写真などを展示した。 (速報展) 「藤原京跡左京七条一坊西南坪出土木簡の展示」 中務省関係の木簡が出土した藤原京跡左京七条一坊西南坪出土木簡の実物を展示した。 「キトラ古墳壁画」(平成14年2月26日から3月24日) 新たに撮影したキトラ古墳の壁画を写真パネルにより展示した。 (参考指標) ・公開日数 316 日 ・展示品貸出数 18 件	B
・入館者数	94,000人以上	94,000人未満 75,000人以上	75,000人未満	入館者数 64,652人	C	
・入館者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果(満足数/回収数) 88.9%	A	
・アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			特別展、速報展では時宜を得た展示を順調に実施できた。調査研究の最新の成果を伝える目的は十分に達成できた。速報性に加えて、正確性などにも留意して、今後、調査研究の進展に即応した更なる充実を図りたい。	—	
・平城宮跡資料館展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			通年の常設展の他に、速報展「平城2001—奈良の都を掘る—」(平成13年10月30日から11月11日)を開催した。この展示では、平成12年度を主体にして、一部平成13年度の成果をも含めて平城宮及び	A	平城宮跡資料館では、常設展のほかに速報展などを実施し、最新の調査成果を公開して、その役割を果たしており、十分に評価できる。

				平城京の発掘調査の成果を公開した。①平城宮第一次大極殿院地区、平城京左京三条一坊、興福寺中金堂、興福寺一条院、興福寺大乘院、西隆寺西面回廊・回廊南地区などの以降写真パネル②平城宮第一次大極殿院地区出土の木簡、土器、一条院出土の土器、瓦、金属工房関連遺物などの出土遺物を展示。 (参考指標) ・公開日数 306 日 ・展示品貸出数 99 件		
	・入館者数	75,500人以上	75,500人未満 60,000人以上	60,000人未満	入館者数 7 8 , 9 5 7 人	A
	・入館者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果（満足数／回収数） 9 3 %	A
	・アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			調査研究の最新の成果を伝える目的は十分に達成できた。速報性に加えて、正確性などにも留意して、今後、調査研究の進展に即応した更なる充実を図りたい。	—
	・飛鳥藤原宮跡発掘調査部展示室展示・公開充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			常設展を通年実施し、「展示室地図表示システム」をより見やすくするために更新した。 (参考指標) ・公開日数 246 日 ・展示品貸出数 144 件	A
	・入館者数	3,400人以上	3,400人未満 2,700人以上	2,700人未満	入館者数 4 , 4 8 0 人	A
	・入館者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果（満足数／回収数） 1 0 0 %	A
	・アンケート結果の展示・公開充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			調査研究の最新の成果を伝える目的は十分に達成できた。速報性に加えて、正確性などにも留意して、今後、調査研究の進展に即応した更なる充実を図りたい。	—
カ 研究成果の公表の結果に関して、適宜アンケート調査等を実施し、常に国民の評価を得るよう努める。	・アンケート等の実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・各研究プロジェクトにおいては、プロジェクトを発展させるためアンケート調査を実施した。①第25回文化財の保存・修復に関する国際研究集会、②民俗芸能研究協議会、③アジア文化財保存セミナー、④国際文化財保存修復研究会、⑤文化財保存修復研究協議会、⑥美術部オープンレクチャー、⑦芸能部夏期学術講座、⑧公開学術講座、⑨黒田記念館における常設展、⑩黒田清輝地方巡回展、⑪博物館・美術館等の保存担当者学芸員研修、⑫博物館学実習 ・発掘調査現地説明会、公開講演会及び研究集会に際してアンケート調査を行った。 (発掘調査現地説明会) ①名勝旧大乘院庭園②平城宮朝集殿院南門③藤原宮大極殿院東回廊・東殿・大型礎石建物 (公開講演会) ①第89回公開講演会「木簡が語る藤原京と大宝律令」他②長安城日中共同発掘調査記念講演会「漢長安城桂宮出土の玉牒研究」、「漢長安城桂宮の発見と研究」、「漢長安城桂宮第4号建築遺構の発掘」 (研究集会) 「古代官衙・集落と墨書土器―墨書土器の機能と性格をめぐって―」	A
	・アンケート調査等実施回数	1 4 回 以上	1 4 回 未満 1 1 回 以上	1 1 回 未満	アンケート調査等回数 2 2 回	A
	・国民の評価（満足度）	8 0 % 以上	8 0 % 未満	6 4 % 未満	アンケート結果（満足数／回収数） すべて 8 3 % 以上	A

			64%以上				
	・アンケート結果の研究成果公表充実への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			参加者数は、従来の水準を維持し、順調に実現できた。今後もこのペースを維持しつつ、調査研究の成果に基づく講演等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握等に力を注ぎ参加者の満足度の向上に努める。	—	
2－② 以下の協議会等を開催し、研究成果の質の向上を図る。 ア 民俗芸能研究協議会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			全国各地の民俗芸能のかかえる様々な問題解決を目指し、各県・市町村文化財保護行政担当者、民俗芸能保存会関係者、専門研究者などが一堂に会して共通テーマに関して研究協議するものである。平成13年9月11日に東京文化財研究所セミナー室において「民俗芸能の記録作成の方法と活用について」をテーマに、これまで先進的な取り組みを行ってきた内外の専門家による事例報告と、アドバイザーを交えた総合討議を実施し、その結果を報告書として刊行した。 ※参加者数に関しては、当初90名以上の参加申し込みがあったが、協議会当日は、台風が本州を縦断し交通機関に乱れを生じ、当日不参加者が予想以上に生じてしまった。	B	民俗芸能研究協議会が、中期計画に基づき順調に開催されたものとして、概ね評価できる。不測の事態により参加人数が目標値に満たなかったのは残念だが、今後更に研修を必要とする地方自治体の担当者を集めるための工夫を期待する。
	・参加者数	90人以上	90人未満 70人以上	70人未満	参加者数 71人	B	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 97%	A	
イ 文化財保存修復研究協議会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			文化財の保存と修復に関する調査研究の方法、修理修復の技術、方法等について毎年各種のテーマを設定して発表と討議を行った。文化庁が招へいた中国山西省博物館の夏路館長と劉軍陳列部主任に依頼し、中国山西省における文化財保護の制度と現状、そして今後の課題等について報告を受けた。	A	中期計画に基づき順調に開催されているものとして、十分に評価できる。参加者については、本研究会の呼びかけをもっと広く行うよう期待する。
	・参加者数	50人以上	50人未満 40人以上	40人未満	参加者数 42人	B	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 100%	A	
ウ 近代の文化遺産の保存研究会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			大型金属船の保存修復を主題として、ヨーロッパの専門家から先進事例の報告と国内の博物館から保存修復上の問題点などに関して多くの報告があった。	A	中期計画に基づき順調に開催されているものとして、十分に評価できる。
	・参加者数	50人以上	50人未満 40人以上	40人未満	参加者数 74名	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 85%	A	
エ 保存科学研究集会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			平成13年12月を開催し、鉛同位体比法と、広く文化財の世界に普及し、一般化している蛍光X線分析法、最近開発されているXRF/XRD同時分析システム、携帯型蛍光X線分析装置、高エネルギー蛍光X線分析法の利用、及び将来性が期待されているレーザーラマン分光分析法に関する諸問題とその対策等について討論を行った。	A	中期計画に基づき順調に開催されているものとして、十分に評価できる。ただし、なぜ参加者が少なかったのかにつき、検討を要する。
	・参加者数	100人以上	100人未満 80人以上	80人未満	参加者数 36人	C	
	・参加者の満足度	80%	80%	64%	アンケート結果（満足数／回収数）	—	

		以上	未満 6 4 % 以上	未満			
オ 在外日本古美術品修復技術研究会	・開催状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			在外日本古美術品保存修復協力事業で海外から修復のために作品が里帰りする機会をとらえて製作材料と技法に関する研究会を開催し、国内向けの工芸品との違いを明らかにする目的で、今年度は平成13年9月13日にアシュモリアン美術館保管の「風景蒔絵ナイフボックス」とハンプルク工芸美術館の「蓬莱蒔絵手箱」を対象に製作材料・技法について修復家を中心に研究会を開催した。 (参考指標) ・参加者数 13 人	A	中期計画に基づき順調に開催されているものとして、十分に評価できる。
	・参加者の満足度				アンケート結果（満足数／回収数） 8 5 %	A	
3 文化財に関する情報・資料の収集・整理・提供 3－① ア 毎年、前年度実績を上回るよう文化財関係の資料・図書の収集・整理・公開・提供を充実する。	・資料・図書の収集・整理・公開・提供状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			(東京文化財研究所) ・資料閲覧室に管理委託される購入及び寄贈図書資料は、その目録作成作業をネットワーク上のリレーショナルデータベースシステムで一元的に管理し、日常的にデータ入力作業を継続・更新している。現在、図書・雑誌・展覧会カタログ等の目録データは、5年計画のもとで、適宜原本照合を進め、冊子自体の目録発行を行う計画である。また、公開可能なデータはイントラネット上の運用評価を経た上でインターネットを通して外部に提供していく予定である。なお、現在運用中の目録データベースは19種である。 ・国際文化財保存修復協力センター国際資料室の整備・公開・活用するために、資料の充実として①外国の文化財や文化財保存の現状及び理念、②文化財保存関連機関、③文化財保護制度、④日本及び諸外国の文化財保護関連法令、⑤各種文化論などの分野について、書籍や映像資料、デジタルデータの購入、資料交換などによる入手を行い、資料室の充実を図った。 (奈良文化財研究所) ・文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供として、遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入及び寄贈による収集・整理を行った。また、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。そのほか、外部利用者の図書利用の便宜を図るため、図書データベース検索用パソコン及びプリンタを設置した閲覧室を整備した。さらに、所外へのインターネット経由による検索サービス提供の実施に向けて公開用図書データベースの開発を行った。 (参考指標) ・目録所在情報公開件数 403,686 件 ・目録所在情報収録件数 414,183 件	A	両研究所とも情報・資料の収集・公開には努力しており、またその外部利用者へのサービスにも配慮していることがわかり、有用的なものとして十分に評価できる。オンライン上のアクセスの可能性等、さらなる整備を求めるとともに、両研究所とも更なる公開の努力を期待する。
	・資料・図書の受入数				2 3, 4 8 9 件	A	
	・目録所在情報作成件数				目録の作成件数 2 6, 2 0 7 件	A	
	・資料閲覧室等の利用者数				外部利用者数 6 7 1 人	A	
イ これまでの実績や蓄積したデータを活用し、文化財関係資料等に関するデータベースの作成を継続・充実し、順次公開する。	・データベースの充実及び公開状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			(東京文化財研究所) ・貴重な伝統芸能の記録を画像・音声・映像資料のデジタル化として、今年度は音声資料の中でも特に劣化の進みやすいオープンリール・テープのデジタル化を行った。 ・「文化財保存に関する国際情報の収集及び研究 ―データベースの作成・公開―」として、今年度は建築史学および文化財保護行政の分野の第一線で活躍した、故関野克氏所蔵書籍の整理を行	A	両研究所とも、その研究成果やその蓄積のインターネットによる公開のためのデータベースの構築に努力していることが認められ、有用的かつ発展性あるものとして十分に評価できる。それらの早期公開を期待する。

					った。この中には様々な国際機関の会議やボロボドールなど個別の文化遺産保存に関わる記録も含まれており、特にユネスコの条約や勧告に関わる資料には、草案や日本政府の意見書なども含まれていて、その成立過程の経緯や日本政府の関与なども知ることが出来、興味深い記録である。 (奈良文化財研究所) - 木簡データベース、全国遺跡データベース、古代・地方官衙・居宅寺院関係遺跡文献データベースなどを作成し、順次公開している。 (参考指標) - データベース公開数 5 種類 - データベース利用件数 34 種類		
	・データベース作成数	1 7 種類以上	1 7 種類未満 1 3 種類以上	1 3 種類未満	作成数 3 4 種類	A	
3－② 文化財情報の電子化及びシステムの構築に関する研究の成果を活かし文化財情報基地としての基盤を整備・充実する。それにより、国民に対して円滑な情報提供を行う。また、両研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を毎年度平均で1 2 年度実績以上を確保する。	- 研究実施状況 - 文化財情報基盤の整備・充実状況 - 情報提供実施状況 - ホームページ充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			(東京文化財研究所) - 写真運営室においては、画像の入力から出力、画像データの管理、形成画像の公開などルーチン(①データ入力、②カラーポジ画像のスキャナー入力、③画像処理カラープリンターへの出力、④CD保存と画像データベースへの登録、⑤資料閲覧室への配架)について、フルカラー化とデジタル技術の応用という観点から、大幅な見直しを行い、これまで行っていた現像過程は全てコンピュータによる画像処理に代わり、廃液等の環境問題を解決した。 - システム管理として、所内ネットワークシステムの適正な運用を図るために、システム管理者を情報調整室長が担当し、各部・センターから選出された委員とともにLAN委員会を構成し、新規メールアドレスの取得やシステム全体の日常的な運用・中長期的な更新計画、保守契約等について協議し、実践している。 - 写真室設備・調査等の整備業務:写真室では各研究部門の要請に従って、文化財の研究に必要な画像を形成する。特にフルカラー化、デジタル化を推し進めていくために、最先端の技術革新に即応しうる設備等を整備する必要がある、高精細デジタルカメラ一式を新たに導入し、特殊画像の形成にも対応できる設備の更新を行った。 (奈良文化財研究所) - 文化財情報の電子化及びシステム構築に関する研究成果を活用した文化財情報基地としての基盤整備並びにホームページの充実を図る事業において、今年度は、木簡、遺跡、古代・地方官衙・居宅・寺院関係遺跡文献の各データベースの内容の充実を行い、次年度のインターネット経由による公開に向けて、公開用図書データベースの開発を行った。また、基盤の整備としてネットワークの更新を行い、ネットワークの高速化、負荷分散、ネットワーク障害時への対応のための機器冗長化、ファイヤーウォール部でのウイルスチェックによるセキュリティ対応が実現した。これにより所内外への電子化情報提供のための情報基盤の充実が行われた。更に、セキュリティ対策として、所内の全パソコンへのウイルス対策ソフトの導入を行った。	A	東京と奈良のみならず、奈良内部でも各地に分散しているだけに、LANシステムの構築は効果を発揮していると思われる。両研究所とも、文化財情報基地としての役割を果たすべく、努力していることが認められ、ホームページのアクセス件数も多く、有用的かつ効率的なものとして十分に評価できる。ウィルス問題はこの1 年間に関係者の間でも問題が生じたケースがあり、注意を要すると思われる。
	・ホームページアクセス件数	360,000 件以上	360,000 件未満 288,000 件以上	288,000 件未満	ホームページのアクセス件数 5 0 7 , 1 4 4 件	A	
4 文化財に関する研修等 4－① ア 埋蔵文化財発掘技術者等研修年1 4 回(種類)、のべ2 0 0 名程度に対し研修を実施する。	・研修の内容・方法の適切性	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			地方公共団体の埋蔵文化財担当者等を対象に1 年を通じて各種課程の研修を実施した。 研修内容は、一般研修2 課程(埋蔵文化財基礎講座、一般課程)、専門研修8 課程(保存科学、文化財写真、測量外注管理、官衙遺跡調査、遺跡保存整備、報告書作成、遺跡環境調査、陶磁器調査)、特別研修2 課程(遺跡地図情報、歴史遺産活用)、特別講座2 課程(遺跡の保存と活用Ⅰ、Ⅱ)の計1 4 課程である。	A	奈良文化財研究所が実施している地方公共団体等の文化財担当職員を対象とする研修事業はすでに定着しており、その内容の充実にも努力している。十分に効果を上げていると認められる。
	・研修実施回数	1 4 回以上	1 4 回未満 1 1 回以上	1 1 回未満	研修実施回数 1 4 回	A	
	・受講者数	2 0 0 人以上	2 0 0 人未満	1 6 0 人未満	受講者数 3 3 1 人	A	

			1 6 0 人 以上				
	・受講者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果（満足数／回収数） 1 0 0 %	A	
	・アンケート結果の研修内容・方法への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			研修企画委員会を開催し、アンケート結果を含む前回実施した研修結果を分析し、研修内容・方法の充実に反映させている。	－	
	・受講生の再教育等フォローアップ状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			発掘調査経験の浅い者向けの一般研修及びその修了者を対象とした専門研修・特別研修を各種開講し再教育に対応している。	－	
イ 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 年1回、25名程度に対して研修を実施する。	・研修の内容・方法の適切性	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			7月9日から19日までの間、全国の博物館・美術館等の保存担当学芸員を対象に研修を実施した。 内容は、保存環境、生物被害、劣化と保存などの講義と実習のほか、埼玉県立博物館でのケーススタディを行った。 なおこのほか、各地域との共催で、東京での研修に参加できない関係者を対象に地域研修を3箇所(受講者計246名)で実施した。開催地は、神奈川県(50名)、滋賀県(85名)、長野県(111名)である。 ※保存担当学芸員研修の当初予定参加者数は25名を越えていたが、直前でのキャンセルが1名あり、さらに国立博物館からの依頼を受けて数名の参加枠を確保していた上級学芸員研修生が、最終的に不参加となったために、結果的に23名となった。	A	博物館・美術館の保存担当学芸員を対象とした研修は、東京文化財研究所ならではの重要な事業であり、順調に行われているものとして、独創性・有用性の観点からも十分に評価できる。なお、アンケートの結果などを参考にして、その内容の更なる改善を期待したい。
	・研修実施回数	1回以上	——	0回	研修実施回数 1回	A	
	・受講者数	25人以上	25人未満 22人以上	22人未満	受講者数 23人	B	
	・受講者の満足度	8 0 % 以上	8 0 % 未満 6 4 % 以上	6 4 % 未満	アンケート結果（満足数／回収数） 8 9 %	A	
	・アンケート結果の研修内容・方法への反映状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			講義、実習の内容、形式についてのアンケート結果を検討し、平成14年度の研修に反映させる。	－	
	・受講生の再教育等フォローアップ状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			既受講者に対するフォローアップ研修を6月に2日間実施した。参加者は15名。このほか、8月に研修修了者OB会を2日間開催し、保存科学の最新の動向について講義や現場見学を行った。	－	
4－② ア 東京芸術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育を推進する。	・連携大学院教育実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を実施			・東京芸術大学との連携大学院教育 大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学領域を、6名の教官（教授4名、助教授2名）で担当。修士課程及び博士課程(各学年2名の定員枠)で大学院生を指導するとともに、文化財保存専攻の大学院生を対象に、次の講義と演習を担当した。平成13年度は2名が修士課程を修了した。 文化財保存学演習、保存環境計画論、保存環境学特論、保存環境学演習、修復計画論、修復材料学論、修復材料学演習。 ・京都大学との連携大学院教育 大学院人間・環境学研究科において5名の教官で担当。修士課程及び博士課程で次のような講義を担当した。平成13年度の受入学生数は、修士課程3名、博士課程2名であった。 保存科学、東アジアの古代都市、日本古代の官衙遺跡等、文化財の遺存状況、埋蔵文化財の遺存状況 ・奈良女子大学との連携大学院教育 大学院人間文化研究科において3名の教官で担当。博士課程で次のような講義を担当した。平成13年度の受入学生数は博士課程5名であった。 律令国家の祭祀形態、歴史考古学の研究方法与現在の研究成果や課題、新しい日本史の歴史資料論	A	文化財研究や保存科学の後継者育成からも重要な事業であり、また文化財研究所の研究員が自己の研究の在り方を顧みる良い機会ともなる。12名もの学生受け入れ実績は十分に評価できる。なお、この3大学だけに限定するのではなく、より広く開放することが望ましいとの意見もあり、検討を期待したい。
	・受入学生数	6人以上	6人未満 4人以上	4人未満	在学生数 12人	A	
イ 東京と奈良において各々年間10名程度の博物館学実習生の	・博物館学実習生受入状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評定を決定			東京文化財研究所では、10名の学生を対象として8月27日から9月1日の6日間、主として日本の近代美術資料に関する博物館学	A	文化財研究所の性格からも、博物館実習の受け入れはこの程度が適正であり、有用的なものとして十分に評価できる。ただし、

受入れを行う。					実習を行った。 また、奈良文化財研究所では、8名の学生を対象として、9月4日から8日の5日間、飛鳥資料館において博物館での展示や展覧会の運営などに関する博物館学実習を行った。		文化財研究所での実習を希望する学生に門戸を開けておくことは必要であろう。
	・実習生数	20人以上	20人未満 16人以上	16人未満	実習生数 18人	B	
	・実習生の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 90%	A	
5 文化財の調査・保存・修復・整備・活用に関する援助・助言 5－① 文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に対する専門的・技術的な援助・助言	・援助・助言の実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			大極殿正殿の施工着手にあたり、施工及び監理内容の検討に資するため、これまで行ってきた復原事業に関する資料を整理し提供するとともに、実施すべき調査研究に関する計画案を提示した。大極殿院の設計においては、平成13・14年度に行うべき設計と研究の原案を作成し、その一部については研究を進め設計に対する助言を行った。 平城宮跡・藤原宮跡等の整備事業に関しては、整備地及び整備手法に関する提案や会議等での説明などを行った。	A	文化庁が行う平城宮・藤原宮の保存整備事業に対する援助・助言に積極的に取り組んでいることがわかり、有用的なものとして十分に評価できる。なお、大極殿の復原を含む平城宮跡の整備事業について一般市民の理解を得るための活動などについても、意を用いられることを期待するとともに、大極殿正殿施工等の検討は内部だけで行わず、外注も考えることも検討すべきと考える。
	・援助・助言実施件数	40件以上	40件未満 32件以上	32件未満	現地調査、会議出席、文書発出、電話等の件数 77件	A	
5－② 地方公共団体等が行う文化財の調査・保存・修復・整備・活用等の事業等に対する専門的・技術的な援助・助言	・援助・助言の実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			（東京文化財研究所） ・文化財の材質に関する調査について、金属文化財に関する解析や産地推定等の依頼43件、絵画・工芸品に関する構造調査の依頼5件を受け、それぞれ調査を行った。 ・文化財の修復に関する依頼が41件あり、それぞれ助言を行った。 ・無形民俗文化財の復活・伝承に関し、43件の調査・助言を行った。 （奈良文化財研究所） ・全国の地方公共団体等が行う史跡整備事業については長崎県厳原町の「金石城跡」の庭園跡の復原、松江市の弥生時代の環濠遺跡である「田和山遺跡」の整備計画、泉佐野市の中世の荘園遺跡である「日根荘遺跡」の整備など、数多くの地方公共団体等の依頼に応じ、援助・助言を行った。整備委員会等への委員就任が166件、依頼による出張件数は415件にのぼる。 ・奈良県内の平城京城においては、民間の開発行為に対する事前発掘調査11件に関し援助・助言を行った。また、飛鳥・藤原京城においては、地方公共団体の要請により、開発行為等に対する事前発掘調査を9件実施し、3件の立会い調査を行った。 ・このほか、文化庁が行うキトラ古墳の予備調査への専門的・技術的協力を行い、12月には温湿度データ調査やデジタルカメラでの石槨内撮影を行った。	A	地方公共団体が行う文化財の調査・保存事業に対する援助・助言はきわめて重要である。平城京城、飛鳥・藤原京城での調査は、大きな成果をあげており、またデジタルカメラによるキトラ古墳の石槨内の撮影成功などは、有用的かつ発展性あるものとして高く評価できる。保存科学については、指導・助言されたことが各地方において具体的に実施されており、効果は著しいものと判断される。なお、東京文化財研究所でもこの事業をさらに活性化することにより、研究所の存在価値を一層高めることを期待したい。
	・援助・助言実施件数	410件以上	410件未満 330件以上	330件未満	委員就任、現地調査、会議出席、文書発出、電話等の件数 1, 567件	A	
5－③ 地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対する専門的・技術的な援助・助言	・援助・助言の実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			・国宝・重要文化財などの指定品及び東京国立博物館収蔵資料の借用に関して館内環境調査を行い、21館に対して報告書を作成・提出した。また、全国133館の美術館・博物館から環境改善に関する相談を受け、助言を行った。これらの内容は各館ごとに環境調査ファイルを作成して調査を行っている。 ・文化財の虫害等に対する依頼に応じ、59件の援助・助言を行った。	A	地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設の保存環境の調査・改善に対する指導は、文化財研究所の重要な事業である。適切に行われ機能しているものとして、有用的であり十分に評価できる。
	・援助・助言実施件数	170件以上	170件未満 140件以上	140件未満	委員就任、現地調査、会議出席、文書発出、電話等の件数 192件	A	
6 前各項の業務に附帯する業務 6－(1) 平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力・積極的	・協力・支援状況 ・維持管理実施状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			平城宮跡等公開活用支援事業として、以下の事業を行った。 （平城宮跡） ・東院庭園の公開と維持管理 ・遺構展示館の公開と維持管理、付属駐車場の警備	A	広大な面積の日常的な公開活用は大変なことであり、大いに評価すべきものと思われる。平城宮跡に限っていえば、訪れた際、粗大ゴミや弁当の空き箱などのゴミが、人がたまる場所以外の宮跡内部に見かけられず、見事に管理されていると思われ、有用的

支援を実施する。また、文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に積極的に協力する。			・朱雀門の公開と維持管理 ・宮跡内トイレの清掃・浄化槽管理 ・宮跡内の巡視、除草・美化管理 (藤原宮跡) ・宮跡内トイレの清掃・浄化槽管理 ・宮跡内の巡視除草・美化管理 (文化庁平城宮跡等管理事務所) ・施設の公開、利用等にかかる連絡調整等 ・各種行事、発掘調査等の連絡調整 ・宮跡内施設・設備の修繕等にかかる対処				であり十分に評価できる。
6－(2) ①解説ボランティア事業を運営する。	・ボランティア活動状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			平城宮跡解説ボランティア事業として、以下のとおり行った。 ・解説ボランティアの募集と運営 ・解説ボランティアによる、平城宮跡内及び施設内での案内と解説 ・解説ボランティアに対する研修や学習機会の提供 ・平城宮跡ぶらりウォークの開催	A	積極的に取り組み、大きな成果を上げていると認められる。本活動は始まって日が浅く、我が国での定義がこれからであること、またボランティアとしての知識や資質をも備えた人を養成することも含め、長期的な展望に立って評価すべきと思われる。
	・ボランティア登録者数	100人以上	100人未満 80人以上	80人未満	ボランティア登録者数 98人	B	
	・事業参加者数	45,000人以上	45,000人未満 36,000人以上	36,000人未満	ボランティア事業への参加者数 62,318人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 93%	A	
②各種ボランティアに対して、活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等の支援を行う。	・ボランティア支援状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			奈良市観光ボランティアへの活動機会の提供や、NPO平城宮跡サポートネットワークによる「親子で学ぶ木簡づくり」事業に協力した。また、『続日本紀』読書会など様々な学習会を開催した。	A	文化財保護には、市民グループとの提携が不可欠であり、有意義な取り組みが行われていることは、有用的かつ発展性あるものとして十分に評価できる。学習会の開催件数ならびに参加者が当初目標の4倍に達したことは当事者が考える以上に一般の関心が高いことを意味すると思われる。調査・研究の場としてのみならず、一般への生涯学習、あるいは青少年向けの教育の場として、より一層伸ばしていくことは重要であろう。
	・ボランティアに対する学習会実施回数	2回以上	1回	0回	学習会の開催回数 8回	A	
	・参加者数	150人以上	150人未満 120人以上	120人未満	学習会への参加者数 597人	A	
	・参加者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 100%	A	
③ミュージアムショップを委託により運営する。	・運営状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			平城宮跡資料館及び飛鳥資料館のミュージアムショップを委託により運営し、図録等の販売を行った。	A	ミュージアムショップの委託運営が適切に行われており、十分に評価できる。刊行物の販売方法やミュージアム・グッズの開発など、さらに検討の余地はあると思われる。
	・ミュージアムショップの利用状況	1,700人以上	1,700人未満 1,400人以上	1,400人未満	利用者数 2,158人	A	
④平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対する満足度を調査し、サービス充実の目安とする。	・サービスの充実状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施			11月から12月の2ヶ月間、平城宮跡の来訪者に対する満足度アンケート調査を行い、93%以上が満足しているという好評な結果を得た。また、飛鳥資料館では11月の1ヶ月間アンケート調査を行い、展示説明に対して75%以上が満足しているとの結果を得た。	A	平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等への来訪者に対するサービスの充実は、アンケート調査結果から判断して十分に評価できる。なお、飛鳥資料館の展示説明に対するアンケート調査による満足度が75%というのは、やや低すぎるように思われる。アンケートの設置を1年中通して行い、観覧者の傾向を追ってみることも検討してみてもだろうか。
	・来訪者の満足度	80%以上	80%未満 64%以上	64%未満	アンケート結果（満足数／回収数） 95%	A	

			係員級 (研究職員) 1名 (国立大学との交流) 部長級 1名 (文化庁との交流) 室長級 1名 (文化庁との交流) ・転出 (事務系職員) 部長級 1名 (大学共同利用機関との交流) 職務能率の増進状況 ・ 福利厚生 健康診断、人間ドック、常備薬・健康増進器具・貸出レジャー用品の購入、レクリエーションを実施した。 ・ 職員の能力開発等の推進 企業会計、簿記等に関する研修会を実施したほか、職員が各種の研修に参加。 (参考指標) ・ 常勤職員数 128名 (理事長・理事含)		
2 施設・設備の整備を計画的に推進する。	・施設、設備の整備状況	定性的評価を記述し、委員の協議により、評価を実施	奈良文化財研究所の本庁舎地区施設の再構築を図るため、再開発検討委員会及びワーキンググループを設置した。また、黒田記念館の改修工事等を実施した。	A	奈良文化財研究所の本庁舎地区の再構築・再整備は不可欠と思われる。その準備への取り組みが始められていることは適切であり、研究所の今後の発展性の観点からも十分に評価できる。